



地域に生き世界に伸びる

No.100
2007

12月号

ご挨拶

地域と大学広報との関わり

—創刊100号を迎えて—

トピックス

秋の名誉教授会開催

まちかね祭開催

TA（ティーチング・アシスタント）による広報活動

—学生の視点でみる大阪大学—

阪大NOW



大阪大学広報誌

2007 12月号

No. 100

目 次

ご挨拶	3
トピックス	4
役員室だより	6
TAの活動	18
キャンパスニュース	22
表彰等	45
人事	50
訃報	52
インフォメーション	53
ガイドマップ	55
インタビュー	56
海外レポート	58
留学生	60
交流協定大学	62
クラブ&サークル	63
トピックス	64

表紙デザイン：株式会社ココティエ

阪大NOW 表紙の変遷



No.1 (1998年6月号)



No.32 (2001年1月号)
※創立70周年



No.71 (2004年4月号)
※法人化後第1号

No.84 (2005年8月号)
※全ページカラー化・
リニューアル



No.87 (2006年1月号)
※現在の表紙デザインに



No.99 (2007年10月号)
※大阪外国語大学と統合



『地域と大学広報との関わり』 —創刊100号を迎えて—



平成10年6月、それまでの大阪大学広報誌であった『学報』が「読む」ことを意識した『阪大NOW』に生まれ変わり、今回100号を迎えました。これまで大阪大学では様々な出来事があり、読者の皆さんに「今」の大阪大学を伝え、広報誌としての役目を果たしてきたと思います。

今年10月には大阪外国語大学と統合し、大きな変革の節目となりました。新たな大阪大学をこれまで以上に知っていただくためにも、さらに内容を充実し、広く地域社会の皆さんにも読んでいただき、身近に感じていただきたいと考えています。このことが社会学連携を標榜する大阪大学広報誌の役目だと考えます。

大阪大学では、在学生向け、高校生向け、研究者向けなど、いくつか対象を分けた広報誌を発行していますが、この他、ホームページを通して、教育、研究、社会貢献に関するさまざまな情報を積極的に発信しています。これまで、部局のホームページから発信されている情報が多く、大阪大学の活動の全体像を見ることは困難でした。そこで、情報を集中し、一カ所にアクセスすれば社会学連携活動全体が見渡すことができるよう、また地域の皆様のご意見をお聴きできるよう、整備していきたいと考えています。

これからの地域との連携として、大学の知を、研究と教育の面で地域と共有することは重要なことと考えています。研究面としては、研究内容や業績などが、教員個々の情報として研究者総覧で公開されており、知の共有がなされていると言えるでしょう。しかし、この情報は、大学生や高校の教師・生徒、また地域の皆さんにとってはハードルの高い内容であり、また気軽に相談できるようにはなっていないことから、残念ながら教育面での情報にはなっていないといえます。そこで、教育的観点から指導・助言や相談のできる内容を蓄えた人材バンク（教育支援のための人材バンク）をつくり、情報を公開し、大学の知を小・中・高や地域の皆さんと共有し、また双方向の対話を通して、地域に貢献することを計画しています。大学の知は、地域の中の知でもあります。

大阪大学は、あらゆる情報を発信したいと考えています。大学と地域の皆様との有機的な連携がダイナミックなコミュニティをつくる一歩になることを願っています。

大阪大学理事・副学長（評価・広報担当）

高 杉 英 一

秋 の 名 誉 教 授 会 開 催

11月27日(火)、リーガロイヤルホテルにおいて、名誉教授89名及び名誉教授から招待された鷺田清一総長以下部局長等26名の出席のもと開催されました。



熊谷信昭名誉教授



川島康生名誉教授

詳細は、キャンパスニュース（43ページ）をご覧ください。

ま ち か ね 祭 開 催



11月2日(金)から4日(日)まで3日間に渡り、『彩(いろどり)』をテーマに第48回大阪大学まちかね祭が開催されました。





大阪大学の近況報告を述べる鷺田総長



詳細は、キャンパスニュース(33ページ)を
ご覧下さい。



役員室だより

2007.12 Vol.21

平成 19 年も、残りあとわずかとなりました。この一年を振り返りますと、大阪大学の歴史の大きな転換点ともいうべき大阪外国語大学との統合をはじめ、教育・研究・産学連携のすべての面で、特筆すべき成果を発揮できた年でした。このことは、本学構成員のみなさまがそれぞれの場所で工夫と力を尽くされたおかげであると思っています。

最近、タイムズ紙において世界の大学ランキングが発表され、大阪大学は前年の 70 位から 46 位にランクアップいたしました。このようなランキングに一喜一憂するつもりはありませんが、大阪大学がかねてより以上の評価を受けたことはたいへんに励みになります。

大阪大学は、〈知〉と〈文化〉の創造的拠点として、さらには「社会に開かれた大学」として、研究と人材育成という、大学本来の使命をしっかりと果たしていくとともに、産学連携と社学連携の両輪で厚く社会に貢献していかなければなりません。ときめきのある研究と教育の場、そして働きがいのある職場をつくりあげるため、今後ともみなさまと力を合わせていきたいと考えています。

さて、今号から、社学連携担当の武田佐知子理事・副学長にも執筆をお願いしています。来春に本格始動する「21 世紀懐徳堂」をはじめ、大阪大学が社学連携というかたちであらたに取り組もうとしている事業について、みなさまにお伝えしていきます。

(驚 田 清 一)

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による組織整備として、次の事項が認められました。

- ・ 医学部附属病院中央診療施設の設置（平成 20 年 2 月 1 日）
小児医療センター
- ・ 医学部附属病院中央診療施設の設置（平成 20 年 4 月 1 日）
オンコロジーセンター
- ・ 医学部附属病院中央診療施設の改組（平成 20 年 4 月 1 日）
臨床治験事務センター → 臨床試験部
- ・ 国際公共政策研究科国際公共政策専攻の連携分野の設置（平成 20 年 4 月 1 日）
グローバルリーダーシップ連携分野

多様な人材活用推進委員会

◇「研究支援員制度」による採用者の決定について

平成19年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業において募集しました「研究支援員制度」の採用者（利用者及び研究支援員）が、下表のとおり決定しました。

なお、平成20年度第Ⅰ期の募集は、1月中に行います。実施要項など詳細は「多様な人材活用推進委員会」(<http://55099zzwd.coop.osaka-u.ac.jp/diversity/>)のホームページに掲載していますのでご覧ください。

	利用者の所属	利用者の職名	支援員種別	研究支援員の所属	研究支援員の学年
1	医学系研究科	准教授	支援研究者	医学系研究科	博士後期課程修了
2	医学系研究科	助教		医学系研究科	博士課程単位取得退学
3	産業科学研究所	助教		学外	博士課程修了
4	産業科学研究所	助教		工学研究科	博士後期課程修了
5	医学系研究科	助教	研究補助員	医学部保健学科	学部3年生
6	医学系研究科	助教		医学系研究科	博士後期課程3年生
7	医学系研究科	特任助教		工学部応用理工学科	学部2年生
8	薬学研究科	特任研究員		薬学研究科	博士前期課程2年生
9	工学研究科	助教		工学部応用自然科学科	学部4年生
10	産業科学研究所	特任助教		理学部化学科	学部4年生
11	理学研究科	特任研究員		理学部生物学科	学部3年生
				理学部生物学科	学部3年生
12	サイバーメディアセンター	准教授		基礎工学部システム科学科	学部4年生
13	高等司法研究科	教授		法学部法学科	学部3年生

◇第1回男女共同参画シンポジウムの開催

来年1月25日(金)に、第1回男女共同参画シンポジウムをコンベンションセンターで開催します。「多様な人材が活躍する大学をめざして」と題して、外部から2人の講演者をお招きして、Ⅰ部Ⅱ部構成で行います。

第Ⅱ部では、遠山敦子元文部科学大臣（現新国立劇場運営財団理事長）を囲んでのオープンディスカッションを行います。鷺田清一総長自らが司会をされ、遠山さんと来場者との間で活発なトークが展開されるよう、趣向を凝らした内容を考えています。遠山さん、総長と是非お話をしてみたいと思われる方の多数の参加をお待ちしています。（詳細は、インフォメーション（54ページ）に掲載）

同窓会連合会の動き

同窓会連合会では今年の3月から会員募集を行っており、11月末現在で卒業生や教職員OBをはじめ、現職の教職員を合わせて約2,900名の方に入会いただき、11月初めには連合会会員証を発行しました。

会員証の提示で、大阪大学中之島センターの交流サロン利用に際してのサービスや、千里阪急ホテル内の直営レストランでの料金割引の他、会員限定の優待料金でご利用いただける宿泊施設との提携などを検討中です。

また、会員証発行に合わせて同窓会連合会ホームページに会員専用のポータルサイトを開設しました。会員相互の情報交換の場として、あるいは趣味を同じくする会員の語らいの場として広く活用していただけます。

同窓会連合会への入会は随時受け付けております。まだ入会されていないOB、教職員の方々には、この機会に是非加入いただきますようよろしくお願い申し上げます。

詳しくは同窓会連合会ホームページをご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

大阪大学同窓会連合会会員証

下記の者は本会会員であることを証明する

氏 名： 阪 大 太 郎



Osaka University
Federation of
Alumni Association

大阪大学同窓会連合会

入会年：2007

施設マネジメント委員会

阪大坂は歩行者優先道路です。

(自転車等は降車して手押しで通行してください)

平成18年に通学用歩行者優先道路としてリニューアルしました「阪大坂」は、学生、教職員、近隣の住民の方が楽しみながら登り降りできるよう、ゆったりとした幅員を確保し整備しました。阪大坂は急勾配であり、自転車等が猛スピードで下ると危険なため、事故防止対策として、自転車等は降車して手押しで通行するよう交通マナーパンフレット等で注意を喚起しています。ところが、自転車と人の事故やヒヤリハットの事例が多発し、平成19年6月に注意喚起の看板「自転車事故多発：阪大坂ルール：自転車・原付は手押しで通行せよ」を設置しました。

しかし、看板あるいはパンフレット等による注意喚起では不十分で、危険な状態が続いたために、10月から警備員による自転車等の降車周知を行っていますが、未だに十分な成果を挙げることが出来ない状態が続いています。

阪大坂は、歩行者優先道路であり大阪大学のキャンパスの一部でもあります。この場所で、自転車による悲惨な事故が起こることがないように、付近住民の方も含めて、くれぐれもご協力をお願いします。



教育・情報室

入学式の日程

大阪大学の入学式の日程を、原則として毎年4月1日（1日が日曜日の場合は4月2日、1日が土曜日の場合は4月3日）に固定することになりました。なお、大阪外国語大学との統合により学部生が増加したため、入学式・卒業式は吹田地区体育館で午前と午後の2回に分けて行われます。



今年度の入学式の様子

競争的教育支援プログラム

これまで、大阪大学は競争的教育支援プログラムの申請を重視してきました。文部科学省は平成20年度の概算要求において、こうした競争的プログラムのうち「現代GP」と「特色GP」を発展的に解消し、新たに「質の高い大学院教育推進プログラム（仮称）」を開始する方針です。予算規模は平成19年度の82億円から、173億円に拡大して財務省に要求されています。このプログラムの詳しい内容はまだ明らかになっていませんが、今後の展開に注意を払い、各部局から積極的な応募がなされるようお願いします。

ティーチング・アシスタント（TA）

ティーチング・アシスタント（TA）の取扱いについては、昨秋規程の一部が改正され、それまで授業における補助に限定されていた業務の柔軟化が図られました。この新しい試みについてアンケートを実施した結果、勤務時間管理等の簡素化についてはまだ実現していないところがあるものの、おおむね所期の成果が得られていることが明らかになりました。なお、一部にTAの業務を単純な補助作業のみに限定していると思われる例がみられました。規程改正の趣旨は、優秀な学生に将来の教育者としてのトレーニングの機会を与え、教育能力を獲得するための活動に従事させることです。この趣旨に基づいてTA業務が行われるようご配慮ください。

第3回全学FDセミナー

11月8日(木)にコンベンションセンターで、教育・情報室と大学教育実践センターの主催による第3回全学FDセミナーが開催されました。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 of 山本 泰教授による「東京大学における教養教育の評価と課題」と題する基調講演の後、高等司法研究科の茶園成樹教授、工学研究科の藤田喜久雄教授、理学研究科の荻原 哲教授、医学研究科の和佐勝史准教授により、それぞれの部局における取り組みについて報告が行われました。特に、上から教えるだけの教育に対比されるものとしての「学び」の重要性をめぐって、活発な討論が行われました。

大学に期待されている最も重要な役割は人材育成です。この役割を果たすためには、教えるということについて教員である私たち自身が学び、私たち自身の能力を開発し発展させていく必要があります。今回の全学FDセミナーにはこれまでで最多の教員参加がありましたが、大阪大学としてより望ましい教育を実現していくために、来年度はさらに多くの方々が参加されることを期待します。



大阪大学大学院高度副プログラム

平成20年度から開始する「大学院高度副プログラム」の申請を受け付け、現在検討を進めています。部局や分野を横断する教育プログラムや社会人を対象とする教育プログラムなどについて、教育改革が実現しやすい環境を作っていくためには、制度的な整備が必要です。必要なものについて教育・情報室で検討し、可能なところから進めていく予定です。各部局の検討の中で直面する具体的な問題について、部局長を通じて要望を教育・情報室長宛に提出していただくようお願いします。

CIO・CIO 補佐官会議

教育・情報室長は、大阪大学の情報基盤を整備する情報基盤デザイン機構の機構長としてCIO (Chief Information Officer) を務めており、これを3名のCIO 補佐官が補佐する体制がとられています。CIO とCIO 補佐官が定期的に集まり、CIO・CIO 補佐官会議を開催することになりました。これは、大阪大学の情報戦略について検討を進め、情報基盤整備を強化することを目的としています。

1月25日に国際産学官連携シンポジウムを開催

知的財産本部、スーパー産学官連携機構では、平成20年1月25日(金)に本学中之島センターにおいて、国際産学官連携シンポジウム「戦略的シーズ創生に基づく国際産学官連携（仮）」を開催します。日本製薬工業会会長の青木初夫氏（アステラス製薬（株）会長）の基調講演のほか、本学における国際的産学官連携の取組の報告等を予定しています。詳細は、順次、知的財産本部ホームページ（<http://www.ipo.osaka-u.ac.jp/>）に掲載いたします。

知的財産に関するセミナー・講習会を開催

知的財産本部では、発明等の創出・管理・活用のほか、学生や学内外を対象とした講習会、セミナー等を、10月、11月にかけて開催しました。

10月には、技術開発と知的財産の切り口から、産学が本音で語り合い交流する場として、「知財サロン」の第1回を開催しました。今回は、「化学材料および金属材料の最新動向・ニーズと知財動向」をテーマとし、企業の研究開発や特許責任者の方にご講演いただきました。第2回以降も別テーマで開催します。情報は、順次、知的財産本部ホームページ（<http://www.ipo.osaka-u.ac.jp/>）に掲載します。

また、学生を対象とした「知的財産セミナー」を、特許庁、近畿経済産業局との共催により、吹田・豊中両キャンパスで、それぞれ、「強い特許を取得するための研究の進め方」、「弁理士という職業と知的財産活用について」と題し、各1回開催しました。講演は実務家講師が行い、参加者からは多数の質問が寄せられ予定時間を超過しましたが、終了後も講師の前に参加者が列をつくり、質問や意見交換を行う等、双方向性の高いセミナーとなりました。

学内向けとしては、昨年度に引き続き「産学官連携・知的財産担当者等講習会（入門・初級編）」を開催しました。この講習会は、学内の産学官連携・知的財産関連業務に従事する教職員を対象に、業務に必要な知識の修得、実務能力の向上を目的として開催しています。今年度は17名が受講し、うち16名（1名は既合格者）が修了試験として知的財産検定2級（特許）を団体受検しました。

また、学内外の教員・研究者向けの「ライフサイエンス分野における特許審査セミナー」を特許庁等と共催する等、知的財産に関する知識の普及に努めています。



産学官連携・知的財産担当者等講習会
（あずさ監査法人 小林礼治氏の講義）



ライフサイエンス分野における特許審査セミナー
（特許庁 山中隆幸氏の講義）

評価・広報室

平成18年度達成状況評価の実施

11月27日に平成18年度部局達成状況評価書を各部局へ送付しました。この達成状況評価書は、平成18年度実績に対するコメント、平成18年度実績と平成19年度計画との整合性、中期計画達成に向けた留意点等を中心に、当室としてのコメントを記載しています。

各部局におかれては、平成19年度計画の推進及び平成20年度計画の策定に向け、本評価書を活用いただきますようお願いします。

なお、各部局の達成状況評価書は、ホームページ（学内専用）に掲載しております。

https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sh/hyoka/18index.html

平成19年度業務実績報告書等の作成

現在、各部局・各室等において平成20年度計画（案）を策定しているところですが、本年度も昨年度同様に、次のスケジュールで、平成19年度業務実績報告書の作成を予定しています。

今回、関係部局においては、（独）大学評価・学位授与機構による「教育研究評価」－現況調査表の作成との並行作業となりご負担をおかけしますが、ご理解・ご協力くださるようお願いします。

なお、これらに関するスケジュールは、次のとおりです。

参照：https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sh/hyoka/pdf/nittei.pdf（学内専用）

- ◆12月～1月：各部局・各室等において、平成20年度計画（案）を策定
- ◆2月～4月上旬：各部局・各室等において「平成19年度達成状況評価シート」を作成
- ◆4月上旬：各部局・各室等から「平成19年度達成状況評価シート」を評価・広報室へ提出

評価・広報室において「平成19事業年度に係る業務の実績及び中期目標期間（平成16～19事業年度）に係る業務の実績に関する報告書（案）」を作成

- ◆6月：同案を教育研究評議会、経営協議会、役員会で審議
- ◆6月末：大学の「19年事業年度及び中期目標期間業務実績報告書」及び「中期目標の達成状況報告書」・「現況調査表」を文部科学省へ提出

阪大ニューズレター No. 38 の発行



阪大ニューズレター No.38を発行しました。No.38では、「統合記念式典」を特集し、紹介しています。

また、在学生（学部学生）の保護者の方々にも送付することになっています。

財務・会計室

平成19年度予算補正

法人化後の大学予算は、学生納付金収入（授業料、入学料、検定料）、附属病院収入などの自己収入額の実績に応じて適宜収入予算を見直し、その増減に対応した支出予算の見直しを行う作業である予算補正案の編成作業を行う必要があります。

このため、年度当初の収入見込額と上半期の収入実績額を基礎として見込み直した収入見込額との増減額を支出予算に反映させて策定した平成19年度予算補正（第1次）案が、役員会において承認されました。

学内資金貸付制度

法人化後は自主性・自律性が拡大し、各法人の工夫と自助努力による運営が求められており、また、法人内においても各部局の自助努力を基礎とした計画的な運営を求めています。これまで、各部局の運営努力に対して全学的予算で「予算配分」により支援する仕組みはありましたが、部局の自助努力を求めている経費の中には、一時的に多額の資金を必要とするため、単年度の部局予算では資金が確保できない場合も想定されることから、「貸し付け」による支援も必要と考え、学内資金貸付制度を設けました。

制度の概要は次のとおりです。

1. 財 源：目的積立金等。
2. 貸付対象：施設・設備の整備等に必要な経費。
3. 貸付利子：原則として付さない。ただし、本貸付によって長期資金運用財源に影響を及ぼす場合は貸付利子を付す。
4. 返済期間：原則として貸付の翌年度から5年以内。ただし、貸付利子を付す場合は5年を超える返済期間も可能とするが、貸付対象が資産の整備の場合は当該資産の耐用年数を超えないものとする。
5. 申込時期：貸付を希望する年度の前年度の1月末日。ただし、緊急を要する場合は随時。

平成19年度教育研究等重点推進経費の執行計画

「教育研究等重点推進経費」の第4次執行計画案が、役員会で承認されました。今回は、競争的研究資金の適正かつ効率的及び効果的な使用の一層の推進を図るため、不正使用防止計画推進室の設置に係る執行計画となっています。

部局名等	事 項 名	執行計画額
研究推進室	不正使用防止計画推進室に係る特任事務職員	2,920千円

人事労務室

「教職員給与規程」の改正及び賞与の支給基準の決定について

本学では、平成19年の人事院勧告を受け、その勧告に対する国の対応に依拠して給与改正を実施するとの方針の下に、給与規程の改正等を行うこととしました。

具体的には、

- (1) 平成19年度の給与を国家公務員の俸給の引上げ（初任給を中心に若年層に限定。）に準じて引き上げる。
（平成19年4月～）
- (2) 平成19年12月分賞与を国家公務員の勤勉手当の引上げに準じて引き上げる。
- (3) 国の少子化対策の推進を踏まえ、扶養手当を国同様に増額する。
（子等 6,000 円→ 6,500 円）（平成19年4月～）

とすることといたしました。

（ホームページに掲載）

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/kitei/shugyou.html>

【平成19年12月1日改正】

国際交流推進本部

日中学長会議

11月7日(水)から9日(金)にわたって日中学長会議が東京で開催されました。日本側からは、旧七帝大、慶應義塾大学、早稲田大学、立命館大学など16校、中国側からは、北京大学、清華大学を始め、同じく16大学が参加しました。大阪大学からは鷺田清一総長以下4名が出席しました。7日のレセプションには、池坊保子文部科学副大臣、章中国教育部副部長、崔中国特命全権大使などが出席し挨拶をするなど、両国政府ともこの会議を重要視していることが伺えました。この会議は、中国との国交正常化30周年を記念して開催されたのが初めて、今回、第5回目を迎えています。参加大学が両国ともトップクラスで、第5回目を迎えたこともあり、今後は実質的成果を期待すべきであるとの意見が大勢を占めました。



会議は、合計4つのセッションと、総括セッションがシリーズで行なわれましたが、研究面では「何らかの形のプラットフォームの形成」、教育面では「社会のリーダになるべき人材の育成」の必要性が多くの発表者、コメンテータから指摘されました。教育面では、欧米とは異なる「アジア」の高等教育システムを確立すべきであり、欧州のボローニアプロセスのような一種の規制緩和を実情に合わせて工夫しないと単位互換等が困難であること、また、学生交流を進め、リーダとなる人材を養成するには、まず研究者同士が交流し、ネットワークを形成することが必要で、この場合でも、とくにアジア固有のテーマ（例えばゲノムに基づいた創薬など）を選ぶのがよいとの意見が出されました。さらに、中国側から、日本への留学希望者が少ないこと、言葉の障壁が高いことなどが指摘されました。しかし、個別には、例えば、清華大学が東京工業大学、東北大学、アーヘン工科大学と実施しているダブルディグリープログラムのよう、インバランスはあるものの双方向の学生交流が実現している成功例もいくつか紹介されました。

以上のことから、今後、中国側は北京大学、日本側は東京大学を幹事校とし、双方にワーキンググループを編成し、特に教育システムについての検討を長期的視野で行い、次回の日中学長会議でその検討結果を報告することになりました。

中国の大学との交流促進

大阪大学は、中国からの留学生が430名以上と多いのですが、ダブルディグリープログラムのような、履修モデルを相互に提供することを前提とする学生交流は、まだ緒についたばかりです。すでに我が国の30近い大学が中国に海外拠点を設置し、中国の有力大学との学生交流の促進に力を注いでおり、大阪大学が少し出遅れていることは否めません。国際交流推進本部では「中国との交流促進検討ワーキンググループ」を設置して、中国との交流を戦略的に進めるための方策を鋭意検討しているところです。中国の研究者との交流を実施中の、あるいは計画中の諸先生方のご協力をお願いしたいと思います。

上海交通大学との交流

大学間学術交流協定校である上海交通大学との交流の一環として毎年行われている「第12回上海交通大学—大阪大学学術交流セミナー」が、10月29日(月)～31日(水)、上海交通大学で開催されたことは本号でも紹介されています。今回、分科会が4つの分野、すなわち「先端材料・ナノテクノロジー」「情報科学」「環境経済」「サステナビリティ・サイエンス」で行なわれたことと、上海交通大学の日本留学希望者を対象に本学の情報を提供する留学説明会を実施したことに加えて、全体で約200名の参加を得たことは特筆すべきことと思います。なかでも、「サステナビリティ・サイエンス」のセッションでは、大阪大学側の研究者が工学系であるのに対し、上海交通大学側は法学の研究者であり、両者がテーブルを挟んで相対し、環境・エネルギー問題を論じるのはなかなか有意義なことであったと思われました。

一方、このセミナーとは別に、レーザーエネルギー学研究センターで行なわれている「実験室プラズマ宇宙物理」の方面でも、上海交通大学のグループとの本格的共同研究がスタートしようとしており、共同研究室も設置されると聞いています。

このような研究者交流活動が今後も継続し、やがて今後の学生交流に結びつき、日中学長会議で話題となった「社会のリーダとなるべき人材の育成」に寄与できるものと期待しています。



辻理事の講演

社会学連携

大阪外国語大学との統合を機に、10月2日付けで新しく理事・副学長（社会学連携担当）に就任しました。大学のマネジメントに加わるのは初めての経験で、しかも単科大学から、日本有数の学生数を擁する総合大学へと、居ながらにしてワープしたわけですから、とまどうことも多く、まだ駆け出しの見習いですが、一生懸命新生大阪大学を勉強させていただいています。どうぞよろしくお願いいたします。

当面、社会学連携担当ということで、来年4月に予定している「大阪大学21世紀懐徳堂」の立ち上げに向けた作業をしています。企業をパートナーとした産学連携という、主として大阪大学の理工系部局が行ってきた研究面での社会との連携だけでなく、市民を対象とした社会人教育、公開講座や自治体と協力した文化振興について、大阪大学全体として目に見えるかたちに示すためのシステム作りというのが私の仕事です。

本年10月に「大阪大学21世紀懐徳堂」設置準備室が設けられ、設置準備に向けて社会学連携検討委員会において検討を進めているところですが、大阪大学の社会学連携事業をさらに発展させていくためには、学内各部局の積極的な協力が必要不可欠と考えています。今後、学内各部局との連携を進めてまいりたいと考えていますので、是非ご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

（武田 佐知子）

「大阪大学21世紀懐徳堂」

設置趣旨

「地域に生き世界に伸びる」というスローガンを掲げる大阪大学にとって、地域・社会との緊密な連携は極めて大きな目標であり、また課題であります。大阪帝国大学は、その建学の経緯からしてすでに、大学の知的資産と大阪の「民」の活力とを連携させるかたちで創設されました。大阪大学の憲章にある「実学」の伝統とは、この社会学連携・産学連携の伝統、いかえると「学」と「民」とが協働して時代を切り開いていくという精神的伝統にほかなりません。大阪大学は、江戸期の大阪の懐徳堂と適塾とをその精神的源流と位置付けてきましたが、そこにみられる市民のセルフラーニングと先端的研究の伝統を来るべき社会に相応しい仕方で活かし、その成果を国内外にいつそう積極的に発信していかなければなりません。

そこで、これらの目的をより発展させるために、平成20年4月に「大阪大学21世紀懐徳堂」を設置することとしました。

事業概要

- ・社会あるいは市民が大学に対して期待する知的・文化的な「ニーズ」と、大学が提供可能な「シーズ」との「マッチング」を行っていきます。
- ・具体的には、大阪大学が市民に対して公開する講演会、講習会、各種イベント等の社会学連携事業のコーディネート、広報に当たるのみならず、市民からの問い合わせ、相談、依頼等に的確に対応していきます。学内においては、広く情報の収集を行って行きます。
- ・社会学連携の窓口と広報を一本化し、大阪大学が行っている社会学連携事業の情報を広く学外に伝えていきます。
- ・中之島講座、Handai-Asahi 中之島塾をはじめ、市民のセルフラーニングの支援やコンサート・演劇の開催など、大学らしい文化事業をさらに充実させていきます。そして、それらの事業の立ち上げから実施までの全過程を、学生のためのインターンシップ実習のかたちで教育プロセスとしても活かしていきたいと考えています。

設置場所

豊中キャンパスの大学教育実践センターイ号館の1階にある2教室を改修し、大阪大学の社会学連携活動を広く市民の方々に広報するためのギャラリー開設のほか、簡単なイベント、ワークショップ、講座、実習等を行えるような多目的スタジオを整備し、具体的な活動を行っていく予定です。

「大阪大学21世紀懐徳堂」をイ号館に設置することにより、総合学術博物館、待兼山、阪大坂、大学教育実践センターの一带を社会学連携のシンボリックエリアとして活用していきます。



Osaka University Mixed Chorus

11月2日から3日間、まちかね祭が大阪大学豊中キャンパスにて開催されました。木々が赤く染まり始めた待兼山がたくさんの屋台でにぎわっているなか、C棟大講義室では「阪混」の名で親しまれている、大阪大学混声合唱団の『まちかね祭コンサート』が行われ、多くの人が彼らの歌声に耳を傾けていました。

**みんなで歌う合唱だから、
一人じゃ出せない迫力がある。**

**正指揮者 諸口浩成さん
(理学部3年生)**



異なる音が混ざりあって ハーモニーがうまれる。

副指揮者 田中時光さん
(理学部2年生)



コンサート当日。朝の冷え込みの残る大講義室に、団員が集まってきました。リハーサルをするためです。

約1時間ほどのリハーサルでは、本番に向けて、のどを開き、団員の士気を高めていきます。まずはストレッチ。大きく体をひねって筋をのぼしたり、軽くジャンプしたりして体を温めていきます。十分に温まったところで発声。拍にあわせて腹式呼吸をおこなうブレスから、口を閉じておこなうハミング。今度はそこから徐々に口を開けて声を出していきます。副指揮者の田中さんの指導のもと、ところどころ談笑も交えながら和やかな雰囲気ですウォーミングアップはおこなわれていました。

これらが終わると、本番で歌う曲の確認。リズムの難しいところ、音の取りにくいところなど、本番に備えて念入りにチェックが行われていきます。団員のなかには、当然春から合唱を始めたばかりの新入生もあり、真剣な表情で歌声を響かせていました。

ここで注目するのが団員たちの服装です。混声合唱団では1年生のときに学年ごとにパーカーを作る伝統があります。それぞれの学年で話し合って色やデザインを決めて、それをまちかね祭コンサートでの衣装にするのです。背中には「We can enjoy singing」など、思い思いの言葉が描かれていました。今年は、4年生が紺色、3年生が茶色、2年生が赤色、1年生が黒色と、ステージはカラフルに彩られていました。

昼休みが終わり、本番が徐々に近づいてきました。

開演が近づくにつれ、多くの観客で講義室は埋まっていきます。中には団員の友人やご両親、卒業したOB・OGの方々もいらっしゃっていました。

そして、開演。客席の両側から団員がステージにあがり、正指揮者の諸口さんの指揮からコンサートははじまりました。

入学式でも歌っている、大阪大学学生歌「エール」を終えると、次は爽やかな「水上」、秋らしく哀愁を誘う「赤とんぼ」と続いていきます。

このコンサートは3部構成になっています。第2部は少人数で編成したグループによって歌われるカルテット。新入生のみで歌われる「鷗」には、入団したばかりの初々しさや、これから団を支えていく力強さが感じられます。4年生女性みの「子ども」では、7人という少人数ながらも最高学年の円熟した歌声が響いていました。

第3部は定期演奏会で歌う曲の中から3曲を歌います。優しい歌いだして高揚感あふれる「はる」、重厚なハーモニーで胸に強く訴えかける「子守唄」。いずれも12月の定期演奏会本番を期待させるものでした。そして、ひと足早いクリスマスを思わせる「An Weihnachten」で、コンサートは幕を閉じました。

今回のコンサート取材して、「歌うことが好き」「仲間と歌うことが楽しい」という団員の思いが伝わってきました。これからも、歌うことを楽しめる合唱団として活動を続けてほしいと思います。



Interview

大阪大学混声合唱団部長 今西優雄さんに聞く

今回大阪大学経済学部4年生であり、混声合唱団の部長である今西優雄さんにインタビューをおこないました。

—— 混声合唱団についてですが、主にどういった活動をされているのですか。

3つのコンサートを中心に活動しています。1つ目は関西学生混声合唱連盟定期演奏会で、神戸大学、関西学院大学、関西大学、同志社大学、立命館大学の混声合唱団とのコンサートが行われています。2つ目はジョイント・コンサートで、関西圏の学校の合唱団や、金沢大学との合同で行うコンサートです。そして3つ目が毎年12月に行う定期演奏会です。その他、大阪府の合唱団が集う大阪府合唱祭、ボランティアとして老人ホームで歌う機会などがあります。学内では、毎年のまちなね祭コンサートや、入学式での学生歌の指導も行っています。



—— 混声合唱団ということで男女一緒に歌いますよね。やはり男女一緒に歌うと良い点がありますか。

良い点は歌声に厚みが出ることだと思います。基本はソプラノ・アルト・テナー・バスの4パートですが、各パートで更に分かれて16パートくらいでハモって歌うこともあります。このような『重厚な和音』を表現できるのはやはり男女混声でないと無理なのではないでしょうか。

—— ここで少し今西さんのこともお聞かせください。合唱を始め、混声合唱団に入部したきっかけというのはなんなのでしょうか。

両親が二人とも合唱をしていたため、もともと歌が身近なものでした。高校で初めて本格的に合唱を始め、歌うことの楽しさを知りました。高校の合唱団は少人数の小さな団だったので、大学では人数の多い大きな団に入りたいと考え、迷わず大阪大学混声合唱団に入団しました。

—— なるほど。では、今西さんが合唱をするにあたって気をつけていることはありますか。

直接合唱とは関係ないかもしれませんが、たとえば鼻歌であっても歌う場合は本気で歌う

ことですかね。よく風呂で鼻歌を歌うんですが、気がつくと何曲も熱唱してたりします(笑)。

—— 今回のまちなね祭での合唱はとてもすばらしく感じられました。どのように練習をされてきたのですか。

普段の練習をこなすのはもちろんですが、部室で一緒になった人達と練習をしたり、上級生が下級生に対して個人的にレッスンをしたりすることで、とにかく歌う機会を多くもつことを重視していました。

—— 今回のまちなね祭での出来栄はどう思われますか。

一生懸命練習してきたので、それなりには歌えたと思います。しかしこれで完成ではなく、やはり12月の定期演奏会での演奏に焦点を合わせて努力しているので、まだまだうまくなるはずです。

—— 今後の混声合唱団のあり方についてどうあるべきだと思いますか。

阪混は創立から約50年にもなるサークルです。それゆえに伝統的に受け継がれてきた運営システムが数多く残っています。伝統を大切にしつつ、現在の状況に見合ったシステムをつくり続ける努力をすることが、今一番重要なことではないかと思います。

—— 今後の活動予定はどうでしょうか。

来年には第50回という節目の定期演奏会となるため、記念コンサートを行う予定です。OB・OGも参加する特別ステージも企画しています。

—— ありがとうございます。たくさんのお客さんが来ると良いですね。

今西さんは部長らしくとても落ち着いていらしゃいました。これからも活躍していただきたいと思います。



Imanishi Masao

TA（ティーチング・アシスタント）による広報活動

—学生の視点でみる大阪大学—

これまでティーチング・アシスタント（TA）は、指導教員のもと、演習・実験等の教育支援業務を通じ、教育者としてのトレーニングの機会の提供、経済的支援を目的に採用されています。

このたび、新しい試みとして、大学の広報活動、特に広報誌作成に係る取材、折衝、編集業務等を通じ、学内インターンシップの役割を果たすものとして、今年後期から3名のTAを採用しました。

今回は、まず身近なものから「まちかね祭」を取り上げ、なかでも本学の入学式等の行事にも協力いただいている「混声合唱団」の活動を通じ、TAの視点による学生の活動を追っていただきました。



（左から）岡田さん、河股さん、持丸さんの各TA

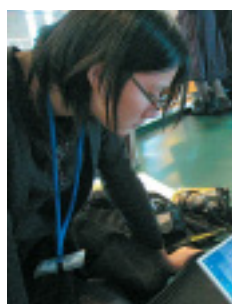


私は、この広報TAに、企画・取材・編集がやってみたいと思い志望しました。しかし、実際の取材をおこなっていくと、上の3つの点に加えて、「新しく人とつながりができる」ことがとても楽しいことが分かりました。これまで全く知らない人と出会って、いろいろなことを話したり教えてもらったり。もしTAをやっていなければ一生経験できなかったようなことが経験できるので、そこがこのTAをやるにあたって最も有意義な点だと感じています。広報TAをやるからには「学生がやっているからまだまだだな」と言われられないように、しっかり一人前の仕事ができるようになりたいと思っています。

河股 秀典：理学研究科物理学専攻博士前期課程1年 核物理研究センター加速器部門所属

この3ページの記事には、私たち3人以外にも、多くの学生の協力がありました。おそらく一人ではこのような記事に纏めることはできなかったと思います。このTA活動を通して、ひとつの記事を作成するチームの一員として、自分の担当部分に責任を持って期限までに仕上げる、また、それぞれの進捗状況を3人が把握しておくために、報告書などで頻りに連絡しあうことが、重要であることを経験することで学ばせてもらいました。TAのインターンシップの経験から、研究室でもくもくと研究しては、また就職セミナーに参加するだけでは分かり得なかった社会人としての基盤を経験することができ、今後の研究生生活や就職活動に繋がっていきたく思います。

持丸 祐子：医学系研究科保健学専攻博士前期課程1年 数理保健学研究室所属



私は大学時代にパンフレットの制作をやっていて、その時の楽しさをもう1度味わいたい、もっと多くの人に見てもらえる記事の制作に携わりたいと思い、今回参加しました。しかし、始まってみるとほとんど手探りで、「大学のことを実はあまり知らない」「思ったように交流できない」などショックなことばかりでした。それでもPTAの方々と話すことや取材、3人での記事の打ち合わせは楽しく、ひとつの形ができあがろうとしている今、TAとして研究室の外に出て得られた「縁」に感謝したいです。そして、それが無駄にならないように、TAとしては周囲をあとと言わせる記事に、今後は自分が出て行く社会に還元していきたいと思っています。

岡田まりん：医学系研究科保健学専攻博士前期課程1年 検査情報学研究室所属

『アート&テクノロジー 知術研究プロジェクト「知デリ」in アップルストア』開催

コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）は、9月22日（土）に大阪（心斎橋）のアップルストアにおいて『アート&テクノロジー 知術研究プロジェクト「知デリ」in アップルストア』を開催しました。

このプロジェクトは、“コミュニケーションデザイン”という未知なる主題の実践的研究のために、「知術」とい



うテーマを掲げ、その定義・意味や有用性について考察するもので、さまざまな領域で活躍される方々との対話の機会を設け、各々の専門分野における「知識」や「技術」を参加者の方々と横断・交換することを通して、新しい発想の創出やアイデアの実現に繋げることを目指しています。

今回の開催は、今年3月の東京（銀座）と大阪（心斎橋）のアップルストアでの実施に続く第3回目で、ゲストには、サウンド・アーティスト藤本由紀夫氏と脳科学者である本学生命機能研究科の藤田一郎教授を迎え、「感覚をめぐる目と耳と脳の対話」をテーマに、脳から迫る科学の知と、目と耳にこだわるアートが、如何に交わり、すれ違うのかを語り合いました。当日は、定員を上回るほど盛況で参加者からの意見や質問も活発に交わされました。

次回は、来年1月に心斎橋、2月に銀座での開催を予定しており、特に心斎橋では学生による企画立案を計画しています。大学と社会が連携して、「知術」を人々に還元（デリバリー）するトークプログラム、通称「知デリ」の試みにご注目ください。

（コミュニケーションデザイン・センター）

薬学部新入生合宿研修実施

薬学部新入生合宿研修が、9月27日（木）、28日（金）の日程で、京都市右京区京北にある京都府立ゼミナールハウスにおいて新入生76名、教職員19名が参加して実施されました。

これは、専門教育の授業が始まる1年次2学期の開始直前に、薬学部の現状と将来に対する認識の再確認とともに、学生と教職員の親睦を深めることを目的として行っているものです。



1日目は、まず、山元 弘学部長の講話「大阪大学薬学部の目指すもの」、八木清仁教授の履修に関する説明がありました。続いて、青山 浩准教授が「呼吸酵素の仕組み」、岡本晃典助教が「四年間で学ぶこと」というタイトルで講演されました。その間、学生は真剣な様子で聞き入っていました。

その後、少人数のグループで分科会を行い、学生と教員が学生生活や薬学の未来などについて、自由なテーマで話し合いました。

夕食は野外でバーベキューし、京都の奥座敷と形容される素晴らしい自然の中、肉や野菜を舌鼓をうちながら、にぎやかに交流を深めました。

2日目は、朝早く出発し、長岡京市にあるサントリーの京都工場を見学した後、大阪府三島郡にあるサントリー研究センターへ移動しました。そこでは、研究室等の見学後、研究所長から研究内容についての話をじっくり聞かせていただきました。

このように、盛りだくさんで少しハードな日程でしたが、実りある研修となりました。

（薬学研究科・薬学部）

8大学工学部長会議開催

第114回8大学工学部長会議が9月28日(金)、大阪大学の当番により豊中市内のホテルで開催されました。会議には、文部科学省から2名、8つの国立大学工学系研究科から研究科長等30名、陪席27名の総勢59名が出席しました。

豊田政男大阪大学大学院工学研究科長による開会挨拶の後、徳岡公人文部科学省高等教育局専門教育課課長補佐から挨拶と「高等教育を取り巻く最近の状況」についての説明がありました。その後、「外部資金などによる大型プロジェクトに対する研究科・大学からの組織的運営支援（事務支援・運営人材支援）、及び運営費交付金と外部資金との有効運用の現状について」をはじめとした協議事項について、各大学の取り組み状況や課題等が広く意見が取り交わされました。



また、会議終了後の懇親会では、引き続き、活発な意見交換が行われるなど有意義な機会となりました。

(工学研究科・工学部)

工学研究科「第2回アトミックテクノロジー国際シンポジウム」開催

平成18年度から4年の計画で推進されている文部科学省連携融合事業「アトミックテクノロジー創出事業」の一環として、「第2回アトミックテクノロジー国際シンポジウム」が10月1日(月)と2日(火)の2日間、淡路夢舞台国際会議場にて開催され、内外の研究者や大学院生ら108名が参加しました。

この連携融合事業では、大阪大学、筑波大学、東京理科大学の3大学が連携して、ナノテクノロジーの次世代の科学技術として期待が寄せられている原子・分子そのものを対象に、さまざまな「操作」や「可視化」を行う科学技術

「アトミックテクノロジー」の研究開発を目的としています。

シンポジウムは、工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター(CAMT)が中心となって企画し、同センターと筑波大学学際物質科学研究センター(TIMES)の主催、東京理科大学ポリスケールテクノロジー研究センター(PTRC)の共催で開催し、「アトミックテクノロジー創出事業」の過去1年半の研究成果を発表すると同時に、各分野を代表する各国の招待講演者から、最先端の研究成果の報告がありました。

「アトミックテクノロジー」というキーワードを掲げたシンポジウムですが、伝統的な学問分野で言えば、物性物理学、材料科学から有機化学、バイオテクノロジーまで含む、極めて学際的な研究分野を対象としたシンポジウムであり、ベテラン研究者を含む多くの参加者にとって、新鮮で意義深い会議であったと好評でした。会議初日の夕方には、懇親会も開催され、上記3大学の学生も数多く参加して、なごやかな雰囲気のもと、伝統的な学問分野や所属大学の枠を越えた国際的な交流が学生レベルでも広がりました。

(工学研究科・工学部)



外国人留学生、外国人研究者に対するワンストップ・サービス試行開始

10月1日(月)、国際部学生交流推進課(吹田キャンパス:ICホール1階)に“Support Office for International Students and Scholars”(以下「サポートオフィス」)を設置し、ワンストップ・サービスの試行を開始しました。

このサポートオフィスは、新たに受入れる外国人留学生及び外国人研究者の渡日前から渡日直後までを対象とした、「宿泊施設手配・斡旋支援」、「在留資格認定証明書交付申請」及び「各種情報提供」の3つの事項に係る全学に及ぶ業務内容について、一元的に対応することを目的としています。

10月18日(木)には、コンベンションセンターにおいて、



サポートオフィス入口看板



サポートオフィスに関する説明会を開催しました。説明会には学内教職員約130名の参加があり、参加者から活発な質疑応答が行われ、サポートオフィスに対する関心、期待の高さを感じさせました。

今後は、外国人留学生、外国人研究者に対する更なる支援内容の充実・拡充を進め、支援体制の強化を図り、本学の国際交流の更なる進展に寄与することを目指していきます。

(国際部学生交流推進課)

工学研究科・工学部とタイ王国・モンクット王ラカバン工科大学工学部が部局間学術交流協定締結

工学研究科・工学部は、10月5日(金)にタイ王国・モンクット王ラカバン工科大学(KMITL)において、同校工学部との間で部局間学術交流協定を締結しました。KMITLは、1960年に日本政府の技術協力の下、電気通信訓練センターとして設立され、現在では工学部、理学部、農学部、情報科学部、建築学部、産業教育学部、食品科学部の7学部から構成され、教員数475人(工学部:176人)、



調印式の様子(左から)Kobchai Dejhan学部長、Kitti Tirasesth学長、豊田研究科長

学生数約17,000人(工学部:約6,000人)を擁する理工系総合大学となっています。キャンパスはバンコク市街から東へ約30kmの場所に位置し、2006年9月に開港したスワンナプーム新国際空港に近接しています。

調印式では、KMITLのKitti Tirasesth学長のウェルカムスピーチの後、豊田政男工学研究科長及びKobchai Dejhan工学部長より挨拶があり、辻毅一郎理事(国際交流推進本部長)からは大阪大学の沿革や現状に関するプレゼンテーションが行われました。調印式の後、昼食時には今後の交流等について意見交換が行われました。

午後は、会場を工学部電気工学科へ移し、電力工学に関する合同セミナーが開催され、KMITLの教員、学生を中心に多数の参加者がありました。辻理事及び豊田研究科長からの大阪大学及び工学研究科・工学部に関する紹介に続いて、工学研究科電気電子情報工学専攻の伊瀬敏史教授、杉原英治准教授が電力工学に関する研究について講演し、KMITLからは大阪大学の卒業生2名を含め、4名の教員による講演が行われました。これを機に、工学研究科とKMITLとの交流がますます活発になることが期待されます。

(工学研究科・工学部)

大阪大学安全衛生講演会開催

10月5日(金)、コンベンションセンターMOホールにおいて、大阪大学安全衛生講演会を開催しました。この講演会は、大阪大学安全衛生週間(10/1～10/7)等にあわせて毎年開催しているものです。

今回は、小山富士雄東京大学環境安全本部副本部長を講師に迎え、大学における安全管理の現状と課題について、東京大学での事故事例を踏まえ事故発生時の具体的な対応状況等について説明がありました。参加者からも積極的な発言があり、活発な質疑応答が行われました。

(安全衛生管理部)



第23回湯川記念講演会開催

湯川記念室の定例行事として毎年開催している湯川記念講演会が、本年度も日本物理学会大阪支部との共催、日本物理教育学会近畿支部の協賛により、10月6日(土)大阪大学中之島センターにおいて開催され、幅広い年齢層の約100人が参加しました。

『身近に見た湯川先生と朝永先生』と題し、慶應義塾大学・武蔵工業大学の小沼通二名誉教授が、湯川・朝永両先生との思い出を含め、お二人の物理と社会的活動の業績、その今日における意義を分かりやすく解説されました。次に、本学理学研究科の野末泰夫教授が『ナノと物性—スーパーアトムを並べる—』と題し、物性を主に支配する電子系がナノメートルのサイズの孔に閉じこめられたスーパーアトムについて紹介されました。

どちらの講演も、聴衆からは熱心な質問が多数あり、知の興味を呼び起こす有意義なものとなりました。

(湯川記念室)



ワークショップ「持続可能な産業都市・地域再生の方策と課題」開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）は、10月9日（火）、吹田キャンパスで、「持続可能な産業都市・地域再生の方策と課題」と題し、『IBA エムシャーパークの地域再生―「成長しない時代」の持続可能なデザイン』（水曜社）の著者、宮城大学事業構想学部の永松栄教授を講演者に招き、ワークショップを開催しました。

このワークショップは、ドイツの都市・地域デザインに学ぶことで、日本の持続可能な産業都市・地域再生の方策を提案するための知識を身につけることを目的としたものです。

講演は、ドイツの「IBA エムシャーパーク事業による産業地域の再生」「歴史地区再生」「旧東ドイツ・ライネフェルデ市の団地再生」のテーマで進められました。

「エムシャーパーク事業」では、産業遊休地と緑地を一体的に捉え、産業施設の転用を行い成功したことが発表され、「歴史地区再生」では、中心市街地を商業集積でなく、文化集積の地とする考えが示されました。最後に、「団地再生」では、旧東ドイツの都市再生の中心課題がライネフェルデ市の取り組みだと紹介されました。

講演で強調されたのは、ヨーロッパ人が空間計画に対す



永松教授

る感覚を持っているということで、陸続きであるということが、ドイツでの広域に渡る空間計画が発展した要因の一つであり、エムシャーパーク事業もこの背景のもと、実現したと考えられるということでした。日本では、都市再生は民間ベースが期待されますが、空間計画を備えるべき公共性について、改めて考えさせられる貴重な機会となりました。

（サステナビリティ・サイエンス研究機構）

平成19年度学術情報リテラシー教育担当者研修（大阪大学会場）開催

平成19年度学術情報リテラシー教育担当者研修（大阪大学会場）が、10月10日（水）から10月12日（金）の3日間にわたり、附属図書館豊中本館を会場として開催されました。この研修は、大阪大学附属図書館と国立情報学研究所との共催によるもので、西日本各地の国公立大学の図書館職員を主に、54名の受講者がありました。



共同討議発表の様子

研修は、情報リテラシー教育の重要な要素である図書館における利用者教育をカリキュラムの中心として、平成15年度より実施されており（平成16年度からは本学が西日本会場を担当）、過去の受講者が研修で得た成果を基に所属機関で実践した事例報告を、講師として発表することも特色のひとつとなっています。

研修では青山学院大学の野末俊比古准教授による講義「学術情報リテラシー教育の理論と動向」に始まり、杏林大学、東京学芸大学、嘉悦大学、茨城大学における実践事例報告、日本ユニシス・ラーニングの武井三奈子氏によるプレゼンテーション技法の講義と実習、東北大学の酒井聡樹准教授、国立情報学研究所の阿蘇品治夫氏による講義が行われました。

また、今年の研修は、班別の共同討議に例年より多くの時間が割かれており、事前には選択されたテーマに焦点を絞った企画毎に、教員・学内との連携協力・分担などについて3日間を通じて活発な討議が行われ、最終日にその討議の成果が発表されました。

（附属図書館）

第8回地域研究交流フォーラム「地域連携の実践」開催

薬学研究科では、10月11日(木)に第8回地域研究交流フォーラム「地域連携の実践」を医学部銀杏会館にて開催しました。このフォーラムは、薬学部創立50周年記念事業の一環として企画されたもので、今回は実践活動に焦点をあてた幅広い内容の講演があり、100名を超える参加者がありました。



第1部の基調講演では、本学高等司法研究科の青江秀史教授が「薬学が目指すべき知的財産の形成」、高知工科大学総合研究所の向畑恭男教授が「高知で藻がいた10年」、本学先端科学イノベーションセンターの兼松泰男教授が「産学・社会学連携の発展：大阪大学の取り組みを中心に」と題した講演を行い、それぞれ、知的財産・地域貢献・産学連携について活発な議論が行われました。

第2部の「薬学研究科からの発信」では、本研究科より辻川和丈准教授が「がんの分子標的治療薬への創薬連携」、小比賀 聡准教授が「迅速簡便な SNP 検出法の開発 — DNA 三重らせんの利用—」、山口進康准教授が「迅速・高精度な細菌検出法の現状と課題」と題して講演を行い、薬学研究科を構成する生物系、化学系、環境系のそれぞれから、実用性を目指した研究を紹介しました。

続いて行われた懇親会では、終始和やかな歓談の中、様々な意見交換が行われ、今後の学術交流の輪が一層広がるものと期待されています。

(薬学研究科・薬学部)

「中之島コミュニケーションカフェ2007 ex-station可能性の駅」開催

コミュニケーションデザイン・センター (CSCD) は、10月12日(金)～10月14日(日)の3日間、中之島公園内「なにわ橋駅」工事現場にて「中之島コミュニケーションカフェ2007 ex-station 可能性の駅」を開催しました。

プロジェクトは、平成20年度に開業予定の京阪中之島線とともに開設される新駅「なにわ橋駅」を、中之島エリアにおける文化芸術の創造と交流の場として活用すべく、大学、アートNPO、地域コミュニティによる共同の社会実験として、昨年度より実施しています。

CSCDでは、主に次の2つのプログラムを企画運営しました。「ラボカフェ・プロジェクト」では、哲学カフェや「企業一ひと新しいメセナの形」、「博士とは何もの?—科学者の虚像と実像」、「映像による異世代間コミュニケーション」といった独自のテーマに基づいた対話プログラムを実施。また、阪大生が授業の一環として取り組んできた企画案を披露しました。

「ハイブリッド・ショーケース」では、地下の工事空間を美的な舞台装置として捉え、オリジナルのファッションショーを実施。哲学者／鷲田清一総長によるコンセプト文、



劇作家／CSCD 平田オリザ教授による総合演出、阪大生のモデル等々、従来のファッションショーの概念を刷新する実験的な試みを実現させました。

その結果、2,000人以上の来場者や朝日新聞の一面に掲載される等々の好評を得ました。この社会学連携は、文化事業の新たな創り方として多方面から期待され、来年度も実施を予定しています。

(コミュニケーションデザイン・センター)

実験系の学生、教職員のための各種安全衛生講習会（吹田地区）実施

10月15日(月)～10月19日(金)にかけて、主に実験系の学生、教職員を対象に下記の安全衛生講習会をコンベンションセンターにおいて実施しました。これらの講習会は以前から実施していたものですが、今回は受講生の利便性等を考慮して、1週間連続で集中的にカリキュラムを組みました。1週間で延べ1,200人の参加者がありました。

- (1) 低温寒剤取扱安全講習会
講師：百瀬 英毅
(低温センター助教、安全衛生管理部兼任助教)
- (2) 高圧ガス取扱安全講習会
講師：百瀬 英毅、山本 仁
(安全衛生管理部副部長・教授)
- (3) 酸素欠乏事故防止講習会
講師：山本 仁
- (4) 非化学系のための化学薬品取扱安全講習会
講師：山本 仁
- (5) 大学における事故発生のメカニズム
講師：太刀掛 俊之（安全衛生管理部助教）
(安全衛生管理部)



百瀬助教

各部局長、各事業場安全衛生委員等による合同巡視実施

11月19日(月)～11月22日(木)にかけて、各部局長、各事業場安全衛生委員会委員、部局安全衛生委員会委員、担当事務の方々による合同巡視を実施しました。部局長をはじめ参加者からは、実際に現場を見て回ることによって問題点に理解が深まり、安全意識が高まった等の感想が寄せられました。

(安全衛生管理部)



実験室を巡視する豊中地区事業場の守山敏樹・産業医、土山 明・安全衛生委員会委員、西田正吾・総括安全衛生管理者（左から）

平成19年度工学研究科博士前期・後期課程10月入学式挙行

平成19年度工学研究科博士前期・後期課程10月入学式が、10月12日(金)に、医学部銀杏会館内阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて挙行されました。

当日は、文部科学省の「国費外国人留学生(研究留学生)の優先配置を行う特別プログラム」に入学した博士前期課程の外国人留学生と、博士後期課程の10月新入生が出席しました。

式は、豊田政男研究科長、谷口研二評議員を始め、副研究科長並びに各専攻長の列席のもと、掛下知行教務委員長(副研究科長)の司会により進められました。初めに、豊田研究科長から新入生歓迎の式辞が述べられ、その後、博士後期課程35名の入学生を代表して応用化学専攻の紀平庸男さん、博士前期課程21名の入学生を代表して、生命先端工学専攻のJONGRUJA NUJARINさんが宣誓を行い、10月入学式を閉会しました。

(工学研究科・工学部)



紀平さんによる代表宣誓

フランス国立科学研究センター(CNRS)等と日仏磁気核融合研究所設立協定締結

フランス国立科学研究センター(CNRS)の国際連携研究所(LIA)の一つとして、「日仏磁気核融合研究所(FJ-MFL)」が、CNRS、本学を含む日仏5機関の共同で設立され、その協定調印式と祝賀会が10月22日(月)に九州大



協定調印後握手する日仏5機関の代表。
(左から)ジャン・マルク・レイエ プロバンス大学副学長、カトリーヌ・プレシニャック CNRS 会長、梶山九州大学総長、本島核融合科学研究所所長、辻大阪大学理事。

学で執り行われました。

FJ-MFLは、今年から4年間、CNRS、プロバンス大学(仏)、大阪大学、九州大学、核融合科学研究所(NIFS)の5機関の間のバーチャルラボとして、ITER(国際熱核融合実験炉)プロジェクトに関連する磁気核融合物理学の共同研究を行います。本学からは、工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センターの磁気核融合研究グループが中心となって参加します。調印式には、フランス側からカトリーヌ・プレシニャック CNRS 会長、フランソワ・ギノーフランス工学アカデミー会長ほか12名、日本側からは、梶山千里九州大学総長、辻毅一郎大阪大学理事、林幸秀文部科学審議官ほか12名が出席しました。

なお、CNRSは、自然科学・人文社会科学の研究者約12,000人を擁するフランス最大の基礎研究機関で、本学とは、既に2005年から、大学間交流協定を結んでいます。また、プロバンス大学と本学は、2006年から部局間交流協定(プロバンス大学物理化学研究科と本学工学研究科・工学部)を結んでいます。[CNRSについては、62ページの「交流協定大学」で紹介しています。]

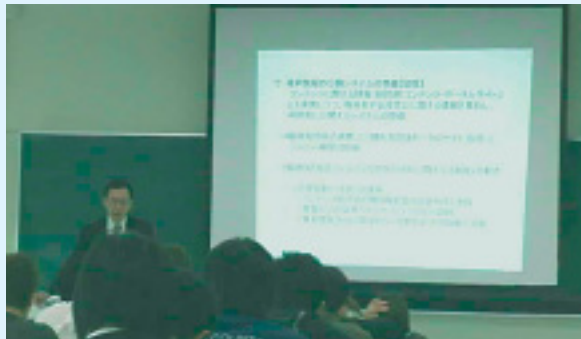
(工学研究科・工学部)

法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科共催 特別公開講義「知的財産の潮流～著作権制度における今日的課題～」開催

法学部授業「知的財産の潮流」では、法学研究科附属法政実務連携センターと高等司法研究科との共催で、各界の第一人者を多数お招きして特別公開講義を行っています。

10月26日(金)、文化庁長官官房審議官の吉田大輔氏により、著作権制度における今日的課題と題して、特別公開講義が行われました。公開講義には、文系理系を問わず、学部1年生から、大学院生、司法修習生、現役弁護士までが参加し、大いに盛り上がりました。

講演では、まず、①許諾に係るコストや不安定さ、②違法なコンテンツ流通の蔓延、③創作・発信形態の変化への対応といった問題が、具体例とともにあげられ、次に、市



場と法制度の役割分担を基本的視点とした様々な対応策が分かりやすく解説されました。参加者からは、著作権に関わるまさに現在の課題について、全体の概略図を頭の中に描くことができ、その課題への対応策がどのようになされていて、今後、どのように発展していくのかについて理解できたなどの感想が寄せられました。

(法学研究科・法学部、高等司法研究科)

医学部保健学科現代GP公開講演会「現場に役立つ発達障害支援の実際」を開催

10月28日(日)、千里ライフサイエンスセンターにおいて、昨年度に引き続き、医学部保健学科主催の現代GP公開講演会「現場に役立つ発達障害支援の実際」が、医療、保健、福祉、教育関係者や学生252名の参加者を得て開催されました。



パネルディスカッションの様子

本年度は、「気になる子どもと保護者への関わり方」を重点テーマとして、発達障害を持つ子どもと保護者への支援のあり方について、現場で活躍されている支援者を招いて行いました。最初に、酒井佐枝子医学系研究科特任講師から、医学部保健学科における現代GPへの取り組みについて紹介があり、次いで、山下裕史朗久留米大学医学部准教授による招待講演「発達障害児と家族の支援：夏期治療プログラムから学んだこと」が行われました。最後のパネルディスカッションでは、パネラーの内藤孝子・全国LD親の会副会長、上好 功関西特別支援教育ネットワーク代表、谷岡とし子北摂杉の子会アクトおおさか副センター長及び山下准教授による活発な議論が行われました。具体的な支援の方法や保護者との関係を構築していく際の工夫に関して、参加者から様々な質疑があり、多機関が連携をとりながら、支援を必要とする子どもと保護者への関わりを継続することの重要性が示されました。

(医学系研究科・医学部)

第12回上海交通大学—大阪大学学術交流セミナー開催

大学間学術交流協定校である上海交通大学との交流の一環として、毎年行われている「第12回上海交通大学—大阪大学学術交流セミナー」が、10月29日(月)から31日(水)まで、上海交通大学で開催されました。

このセミナーは、同大学との交流協定締結を機に、1995年以降、毎年交互に両大学で各分野の研究者を招へいして行っているもので、今年は本学から辻 毅一郎理事・国際交流推進本部長を始め、23名が上海交通大学に招かれました。

初日は、辻理事、Yan Liang Yu 学長補佐の開会挨拶に続いて、各大学2名ずつの基調講演が行われ、本学からは馬越佑吉工学研究科教授がグローバル COE に関する講演を、辻理事が大阪大学の国際戦略に関する講演を行いました。その後は「先端材料・ナノテクノロジー」「情報科学」「環境経済」「サステナビリティ・サイエンス」の4分科会に分かれて議論を深めました。「サステナビリティ・サイエンス」分科会では、大阪市環境局、上海市闵行行政区からの参加者もあり、学術交流のみならず、「大学と社会との連携」の足掛かりにもなりました。

翌日は、ラボ見学等分科会毎のプログラムが実施される一方で、今回初めての試みとして、上海交通大学の日本留学希望者を対象に本学の情報を提供する留学説明会を実施



説明会で説明する古城紀雄留学生センター長

したところ、約50名の学生が集まり、熱心に話を聞いていました。

基調講演・分科会・留学説明会を合わせ、約200名が参加する盛況ぶりで、学生・研究者・地域を含めた両大学の継続的な交流が、社会に貢献する新しい発想・技術、優れた人材の輩出につながることを期待させるセミナーとなりました。

(国際部国際交流課)

理学研究科・理学部とペルージャ大学が学術交流に関する協定締結

理学研究科・理学部とペルージャ大学(イタリア共和国)は、科学研究並びに学術活動の分野における交流と相互協力を実施するために、学術交流協定を10月30日(火)に締結しました。

調印式は、ペルージャ大学 Palazzo Murena において執り行われ、式には、理学研究科長の代理として笠井俊夫教授ほか2名が、ペルージャ大学からは Francesco Bistoni 学長、Francesco Fringuelli 研究科長、Vincenzo Aquilanti 教



授ら多数が出席し、式終了後には、理学研究科における教育研究や国際交流の状況等の情報交換も行われました。

この協定は、テーマを設け、研究プロジェクト及び科学・教育推進事業を積極的に奨励し、本研究科とペルージャ大学数学科、物理学科、自然科学科との間で既に行われている連携と協力を強化することを目的としています。

700年の歴史と伝統を持つペルージャ大学と、教授及び研究者の流動性を高めるとともに、学生の流動性向上にも努めるもので、とりわけ講義やサマーコースへの参加のほか、学術教育プログラムへの参加も奨励することとしています。

また、本年度、本研究科の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム」が(独)日本学術振興会に採択されたことにより、Erasmus Mundus Program(欧州学生・教員交流プログラム)と連携した若手研究者(大学院生を含む)の海外派遣機会が拡大されることとなったため、今回のペルージャ大学との協定は、海外パートナーとの国際的な実践機会の拡充と、教育研究能力を涵養する一助となることが期待されています。

(理学研究科・理学部)

工学研究科と核融合科学研究所が研究及び大学院教育の推進に関する協定締結

10月30日(火)、工学研究科と自然科学研究機構核融合科学研究所は、研究及び大学院教育の推進に関する協定を締結しました。

両機関はこれまでも、エネルギー科学に関わる様々な共同研究を推進しており、エネルギーの発生原理に関わる物理的研究、エネルギーの閉じ込めやエネルギー変換に関する工学的研究、さらに、これらの研究から派生的に発生した学際的研究など共同研究体制を構築してきました。

今回の協定の締結を契機とし、両機関において研究協力及び大学院教育を通じた若手研究者・技術者の育成等について、より組織的な連携体制を構築し、エネルギー科学に留まらず、より幅広い工学分野の学術及び科学技術の振興、連携研究を推進していくこととしています。

調印式は、工学研究科から、豊田政男研究科長、田中和夫教授ら3名が、核融合科学研究所からは、本島 修所長、須藤 滋副所長及び同研究所教職員6名が出席し、核融合科学研究所で執り行われました。調印式終了後、豊田研究科長から、「核融合科学研究所と大阪大学大学院工学研究



調印式にて握手を交わす豊田研究科長(左)と本島研究所長

科の連携協定を活かすために」と題し、工学研究科の現状、核融合科学研究所との共同研究の状況及び大学院教育等について講演が行われ、出席者は熱心に聞き入っていました。
(工学研究科・工学部)

平成19年度大阪大学特志解剖体追悼法会実施

11月1日(木)、四天王寺本坊(大阪市天王寺区)において、平成19年度大阪大学特志解剖体追悼法会が執り行われました。

この法会は、系統解剖及び病理解剖のために大阪大学に御献体いただいた方々を追悼するもので、毎年、四天王寺で実施しているものです。

当日は小雨の中、過去1年間に献体された方々の御遺族をはじめ、医学部及び歯学部解剖学関係各教員並びに本年度解剖実習をした両学部の学生等、関係者約500名の参加者がありました。

法会では、遠山正彌医学部長、米田俊之歯学部長及び両学部の学生代表が慰霊の詞を捧げた後、僧侶の読経の中、両学部教員代表、御遺族代表、大阪大学白菊会会長及び両学部学生代表の焼香に続いて、参加者の焼香が行われました。次に、口腔分化発育情報学講座の脇坂 聡教授から参加者に対して挨拶があり、厳粛な雰囲気の中に閉会となりました。

また、法会終了後、大阪市北区長柄の大学墓地において、昨年度の解剖実習のために献体された方々のうち、大学墓



慰霊の詞を捧げる遠山正彌医学部長

地に埋葬を希望されていた方々の納骨法要が営まれ、御遺族及び大学関係者の見守る中で、17柱の御遺骨が納骨されました。

ここに改めて、御遺族の方々に感謝を申し上げますとともに、故人の御冥福を心からお祈りいたします。

(医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部)

第48回まちかね祭開催

11月2日(金)～4日(日)、大阪大学豊中キャンパスにて第48回まちかね祭が開催されました。テーマ『彩』をもとに、学生が主体となって作り上げたまちかね祭には学内・学外から多くの来場者が集まり、例年以上の盛況が見られました。



ステージでは『Rock Bridge2007』と題して、大阪大学を始め関西学院大学、京都大学、甲南大学、立命館大学の各音楽サークルが一堂に集結しました。音楽を通して各大学間の交流を深めるとともに、まちかね祭を大いに盛り上げてくれました。

『学生から地域へ～四市への政策提言～』と題した講演会では、阪大の学生と池田市の倉田 薫市長、吹田市の富田雄二副市長、豊中市の田中逸郎政策区画部長、箕面市の藤沢純一市長が熱い議論を交わしました。

模擬店では学生が熱心に呼び込みをしている姿が目立ち、メインストリートを賑わせていました。

その他にもさまざまな企画が行われ、まちかね祭を十分に彩っていました。3日間とも天候に恵まれ、また、これといった大きな事故もなく、大好評のうち成功裡に終えることができました。

最後になりましたが、この場をお借りして本年度のまちかね祭に協力していただいた関係者のみなさまに改めてお礼を述べさせていただきます。

(大学祭中央実行委員会)

大阪大学室内楽アンサンブル第5回演奏会開催

OUCE（大阪大学室内楽アンサンブル Osaka University Chamber Ensemble）の第5回演奏会を、11月3日(土・祝)に、コンベンションセンター MO ホールにて開催しました。

いちろう祭、吹田祭関連行事として、年2回、春と秋に演奏会を開いておりますが、大学関係者、近隣にお住まいの方などを中心に、多くの方に来ていただくことができました。アンケートからも、回を重ねる毎に、ご好評の聲が強まっていることに、メンバー一同喜び、励みとさせていただいております。

クラシック音楽、なかでも、室内楽というジャンルは、敷居が高く、少し難しい音楽だというイメージがあるかもしれません。室内楽で、CMや街中で流れているような曲は実はたくさんあり、耳覚えのある曲もたくさんあると思うのですが、曲名を見るだけでは分からない、ということが多いように思います。

OUCEでは、皆さんが知っているような曲から知られざる名曲まで、室内楽の「いいとこどり」をして、お越しいただいた皆様にお気に入りの曲を見つけていただき、室内楽を楽しむきっかけづくりになるような演奏会を目指しております。毎回、趣向をこらしたプログラムを考えておりますので、どうぞ今後もご支援いただき、演奏会へ足をお運びくださいますようよろしくお願い致します。

なお、この演奏会を開くに当たり、事務局総務課及び大



阪大学後援会より MO ホールの使用について一方ならぬ便宜を図っていただきました。また、多くの大学関係者の方に、広報にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。第6回演奏会は、平成20年4月29日(火・祝)を予定しております。

大阪大学で、日常的に音楽を楽しむ時間が持てますよう、また文化の種が育ちますよう、頑張ってまいりますので、ぜひ皆様お誘い合わせの上、お越しください。OUCEの演奏会に来たことがないという方、気軽にのぞきにきてみたら、何か素敵な事が待っているかもしれません。

♪ OUCEの活動は、ホームページ (<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>) をご覧ください♪ たいまメンバー募集中！

(OUCE)

法学研究科・高等司法研究科産学連携プロジェクト 平成19年度公開講義「知的資産を活用した経営と法」開催

11月5日(月)、中之島センターにおいて、法学研究科・高等司法研究科産学連携プロジェクト 平成19年度公開講義「知的資産を活用した経営と法」が、経済産業省の後援を受け、法学研究科附属法政実務連携センター、高等司法研究科、財団法人関西社会経済研究所主催で開催されました。



昨今、企業は国際競争力を確保するために、知的財産を含む知的な活動が介在して生まれる「知的資産」を活用した経営を通じて、企業価値を高めることが求められています。講義では、一昨年・昨年に引き続き、知的資産を活用した経営の意義や具体的内容及びその法的側面について、この1年間の進展を含めた国内外の状況について、経済産業省、あずさ監査法人・(株)滋賀富士通ソフトウェア、塩野義製薬(株)から専門家を招へいし、講演後、パネルディスカッションを行いました。

今回の講座の参加者は、企業からは法務部・経理部・知財部・開発部等の幅広い部門から、また、本学からは法学研究科・高等司法研究科・工学研究科から約70名の参加があり、多くの質問が出されて活発な質疑応答が行われました。

参加者からは、「導入部分があり、さらに経済・法律・会計面から、また一般論だけでなく企業での具体的な実例があり、とても充実した内容であった」等の多数コメントも寄せられました。

(法学研究科・法学部、高等司法研究科)

第10回適塾研究会開催

第10回適塾研究会が、8月7日(火)、9月4日(火)、10月2日(火)、及び11月6日(火)に、大阪大学中之島センターにおいて開講されました。



開講の挨拶をする芝名誉教授

この研究会は、本学が適塾記念会と共催で、適塾顕彰事業の一環として毎年開催しているもので、今回は、「適塾と語学」を共通テーマに、同会理事の芝 哲夫名誉教授、同会評議員の中 直一言語文化研究科教授のコーディネートのもと、中教授が「江戸時代の外国語研究と適塾の蘭学」、「蘭学塾の素読法と明治以降の語学教育」、芝名誉教授が「緒方洪庵の医学用語」、「宇田川榕菴の訳語と現代の化学用語」、日野信行言語文化研究科准教授が「現代の英語教授法から見た適塾」、そして高橋輝和岡山大学教授が「独学事始—洪庵の兄弟子・宇田川榕菴と洪庵門下生の市川斎宮」と題した講演をそれぞれ行いました。

今回の受講生は35名で、受講者は最後まで熱心に聴講し、最終回終了後には講師との懇親会を催すなど、好評のうちに終了しました。

(総務部総務課)

医療安全に関する講演会開催

歯学研究科・歯学部及び歯学部附属病院では、11月6日(火)にD棟4階大講義室において、教職員及び学生等を対象に、医療安全に関する資質の向上及びFDの一環として、講演会を開催しました。

当日は、雫石 聡病院長が趣旨説明をした後、「となりのクレマー」の著者である、メデュケーション株式会社代表取締役の関根眞一氏から「苦情学～患者の心理をつかむ」と題し、第一線でクレーム対応を行ってきた経験や、具体例を交えた講演が行われました。

参加者は300名を超え、盛会のうちに終了し、医療安全に関する認識と理解をまた一つ新たにしたいとの声が聞かれました。

(歯学研究科・歯学部)



第26回千石会総会開催

11月9日(金)にコンベンションセンターにおいて、第26回千石会総会が行われました。

議事に先立ち、植西 亮総務幹事による開会の挨拶、叙勲受賞者の紹介及び物故者への黙祷が行われました。

引き続き議事に入り、辻 仁会長から、新規会員、現会員数等の報告があった後、平成18年度会計報告等について協議が行われました。

最後に、岩切平治総務部長から本学の近況について報告があり、閉会となりました。

総会終了後、福利厚生棟2階大会議室において、賛助会員(現職)の参加を得て懇親会が賑やかに行われました。

※「千石会」とは、大阪大学に事務職員として在職した者が、終生互いに交流し、親睦を重ねることを目的として、昭和57年5月に結成されたものです。

(総務部総務課)



第16回理学研究科技術職員学外研修および学内研修実施

理学研究科技術部では、9月7日(金)に、平成4年度より専門技術の知識・技量等の向上を図ることを目的として毎年実施している学外研修を、今年は「安全」と「科学」をテーマとして、午前中は安全衛生情報センター、午後からは大阪市立科学館で、理学研究科技術職員18名全員が参加し実施しました。

安全衛生情報センターでは、3Dシアターによる安全衛生のビデオ鑑賞、常設および特別展示場の見学および体験、ボランティア解説員の講話を聴講しました。

大阪市立科学館では、館長挨拶、常設展示場の自由見学、プラネタリウム視聴、サイエンスショーに続き、斎藤吉彦先生による「大阪大学理学部の創世紀について」と題し、貴重なスライド写真とともに理学部の歴史について講義いただきました。

研修受講後に行ったアンケート調査では、安全衛生技術センターにおいては安全衛生の重要性が、市立科学館においては化学や物理現象が、体感的でたいへん判りやすく展



示されており、職場の安全はもとより、来年度のいちょう祭における技術部の展示に向けて、参考となる様々なアイデアを得ることができた等回答が寄せられ、今回の研修も大変充実したものとなりました。

また、11月9日(金)には、学内研修を実施しました。

渡會 仁理学研究科技術部運営委員会委員長の開講の挨拶を皮切りに、金澤 浩副研究科長による技術賞表彰・講話、その後、講義として村田道雄教授(化学専攻)による「海の生物の化学戦略 ―微量成分の構造解析―」、岸本忠史教授(核物理研究センター長)による「宇宙の物質創成の謎と2重ベータ崩壊の研究」、及び宮下富夫事務長による「大学法人を取り巻く状況について」が実施されました。



さらに、本年度理学研究科技術賞受賞者である川崎博之技術専門職員による受賞発表、各技術職員による技術発表に続き、グループ研究発表を行いました。

最後に、技術長より修了証書が全員に授与され、今年度も大変有意義に研修を修了しました。

なお詳細については理学研究科技術部ホームページに掲載予定です。[\(http://tech.sci.osaka-u.ac.jp/\)](http://tech.sci.osaka-u.ac.jp/)

(理学研究科・理学部)



産業科学研究所消防訓練実施

産業科学研究所では、10月の大阪大学安全衛生月間、11月の秋季全国火災予防運動の時期に合わせて、総合的な消防訓練を10月12日(金)に茨木市消防署の指導の下、実施しました。今回の訓練は、第2研究棟2階の研究室で火災が発生したことを想定した通報訓練及び避難訓練を実施した後、川合知二所長(防火対策委員会委員長)からの訓示、茨木消防署員による水消火器、屋内消火栓に関する性能や操作などの説明を受け、教職員、学生が実際に水消火器を用いて訓練し、最後に茨木市消防署員による講評がありました。教職員及び学生等約200名が参加し、消火器や消火栓の操作確認と火災予防の意識の高揚が図られました。

(産業科学研究所)



理学研究科・理学部環境美化実施

理学研究科・理学部では、例年実施している学内環境美化の一環として、今年も9月27日(木)に理学研究科周辺の清掃を実施しました。多数の教職員・学生が参加し、用意した350人分の軍手やゴミ袋が瞬間になくなりました。



作業を行う小谷眞一研究科長

当日は、初秋とはいえ残暑の厳しい中、多数の教職員、大学院学生、学部学生及び外国人留学生等総勢約400名が一体となって約1時間にわたり、理学研究

科・理学部構内を中心に豊中地区正門、大高の森付近で、空き缶、空き瓶、ペットボトル、タバコの吸い殻等のゴミ拾い及び除草作業等に精を出し、付近一帯が見違えるように綺麗になりました。

この清掃作業は、日頃忘れがちな環境美化に対する意識を再認識するとともに、教職員・学生が快適なキャンパスライフを送れるよう、美化意識の高揚を図ることを目的として行っているものです。

作業終了後はお茶等を飲みながら歓談し、平素は教育研究の繁多にまかせてお互いに話す機会の少ない教職員、学生のコミュニケーションを深める場としても大いに役立ちました。

(理学研究科・理学部)

産業科学研究所環境美化実施

産業科学研究所では、毎年恒例の所内環境美化のための一斉大掃除を11月9日(金)に実施しました。施設委員会委員長の谷村克己教授の挨拶に始まり、秋の柔らかな陽射しの中、2時間にわたり、200名余りの教職員及び学生が産研敷地内及び周辺一帯の通路、排水溝などの落ち葉拾いや排水溝の土砂上げ、ゴミの収集作業等を行い、ビニール袋や土嚢袋に収められた大量の落ち葉や土砂等を、4台のリヤカーを使って汗水流して運搬しました。産研ではこのような行事には教職員及び学生がいつも一致団結しています。

また、安全衛生の観点から研究室周辺の廊下やエレベータ付近等についても、整理整頓を行いました。

(産業科学研究所)



武道教室～模擬日本刀を使った動き～開催

大学教育実践センター運動健康支援部門では、11月10日(土)、教職員及び学生を対象として「武道教室～模擬日本刀を使った動き～」(指導：坂東隆男大学教育実践センター准教授)を、豊中地区大学教育実践センター(第2)体育館において開催しました。今年で5年目となるこの教



室に、今回は多数の参加希望が寄せられたため、厳正な抽選の結果、選ばれた20名の教職員、大学院生、学部学生の方々が参加されました。

内容は、日本刀の取り扱い方、抜き方、鞘(さや)への納め方、構え方、素振り、打ち方・突き方、そして、全日本剣道連盟制定居合(いあい)の動きを題材としました。昨年までは、平日の昼休みに3日間開催していましたが、今年は土曜日に、昼食休憩をはさみ4時間の実施としたことで、効率よく集中して講習が行えました。参加者の方々は、静かで落ち着いた雰囲気の中で、姿勢、呼吸に気を付けながら、真剣に動きを練習していました。

危険のない安全な模擬日本刀を使用し、すばい動きや筋力、持久力が必要としないため、年齢、性別、体力の有無に関係なく気軽に実施でき、参加者の方々には好評でした。

(大学教育実践センター)

産業科学研究所「第63回学術講演会～知のフロンティア育成とグローバル展開～」開催

産業科学研究所では、11月16日(金)に接合科学研究所荒田記念館にて「第63回学術講演会」を開催しました。

この講演会は、産業科学研究所の創立記念日の前後に開催される記念行事で、本年度63回目となります。

午前中は、荒田記念館内ロビーにおいて、各研究室、附属施設、共通施設による合計50件のポスターセッションを行い、午後からは、同館内ホールにおいて、「知のフロンティア育成とグローバル展開」のテーマでシンポジウムを行いました。

シンポジウムでは、川合知二所長の挨拶の後、公立大学



特別講演中の小林秋田県立大学長



シンポジウムの様子

法人秋田県立大学小林俊一学長(独立行政法人理化学研究所・前理事長)による特別講演が行われました。特別講演は、小林学長の研究者人生を振り返り、現在の研究者を激励する内容で、参加者約100名は熱心に聞き入っていました。続いて、本研究所教員による一般講演を行いました。いずれの講演においても、最新の研究内容が紹介され、まさに本講演会にふさわしい発表が続きました。最後に、朝日一副所長による閉会の挨拶が行われ、盛会のうちに終了しました。

(産業科学研究所)

薬学研究科公開講座「くすりと医療」開催

平成19年度薬学研究科公開講座が、11月3日(土・祝)、17日(土)の2日間、コンベンションセンターにて開催されました。

講座は、薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識がますます必要とされている現在、生涯教育の一環として「くすりと医療」と題し、最新の知見をもとに薬学の現在の課題と将来への展望について、そ



れぞれ最先端の分野で活躍する学内外の6名の講師により語っていただいたもので、薬剤師をはじめ、主婦など幅広い年代層にわたる約40名が受講しました。

開講に当たって、今回の公開講座の座長である中川晋作教授の挨拶と開講についての趣旨説明があり、臨床工医学融合研究教育センターの吉岡靖雄特任講師(常勤)、富山大学和漢医薬学総合研究所の小泉桂一助教、神戸大学大学院医学系研究科の吉田優助教、医薬基盤研究所の山西弘一理事長、帝京大学薬学部の宇都口直樹准教授、薬学研究科の岡田直貴講師により講義が行われました。各講義は、遺伝子治療、がん治療、炎症性腸疾患の病態生理、感染症、免疫療法、ワクチン療法など、医療薬学、医薬品と人との接点に関わるテーマで行われ、科学的基盤から医療に至る広範な内容に、受講生は熱心に聞き入っていました。

また、最終日に行ったアンケート調査では、開催日程・場所などについて一部要望が寄せられましたが、内容的には極めて高く評価され、参加者から今後のこの講座への強い期待が寄せられました。

(薬学研究科・薬学部)

「業務改善アイデア賞」表彰式開催

「業務改善アイデア賞」表彰式が、11月22日(木)、総長室において行われました。

「業務改善アイデア賞」は、「国立大学法人大阪大学における業務改善方法の公募及び表彰に関する要項」及び「業務改善アイデア公募要領」に基づき教職員から提案された業務改善のアイデアを、事務改革推進本部において審査し、採用が決定されたものの中から特に業務改善に資すると認められたものに対して授与される賞で、平成17年度の試行に続いて、今回が2回目の表彰となります。

今回は、平成19年4月以降に応募のあった25件の提案の中から、平成19年9月30日までに採用が決定された7件を対象として選考が行われた結果、以下の4件の提案者に対して優秀者賞が授与されることとなりました。

所 属	職・氏名	提 案 題 名
総務部人事課	主任 北川 健児	扶養親族(手当、共済、税法上)認定事務の改善
法学研究科・高等司法研究科事務部	主任 丸山 敬太	事務系の死亡叙勲処理について
理学研究科	事務長 宮下 富夫	「博士学位論文要旨等の公表」に係る冊子体からWeb化への方法の改善
医学系研究科	主任 石本 太一	KOANの掲示板機能使用の推進(主に学生部からの掲示依頼について)



表彰式では、鷲田清一総長、西田正吾理事・副学長(事務改革推進本部長)、佐々木順司理事・事務局長(業務改善WG議長)等の出席のもと、鷲田総長から表彰状が手渡されました。

また、これら4名の受賞者には、副賞として各5万円が支給されることとなっています。

なお、本制度では、表彰された提案だけでなく、採用された提案は全て実施することとしており、当該対象業務の所掌課が作成した実行計画書に基づき、順次改善が進められているところです。

(事務改善推進室)

平成19年度永年勤続者表彰式挙行

平成19年度永年勤続者表彰式が、11月22日(木)に医学部銀杏会館において、受表彰者27名のうち23名の出席のもとに挙行されました。

式は、鷺田清一総長から受表彰者一人ひとりに表彰状を授与された後、ねぎらいの言葉が述べられ、続いて、受表彰者を代表して大学院薬学研究科の田川俊二氏が答辞を述べ閉式しました。

今年度表彰された方は、次のとおりです。

三浦 新(事)	田山由紀夫(医)	園崎 活子(医病)
滝本 健治(事)	松岡 道尋(医)	嶋田 成美(医病)
服部 圭一(事)	脇坂 道久(医)	前田美紀子(医病)
住吉 賢司(事)	田川 俊二(薬)	池内 友子(医病)
増田 敏裕(事)	重弘真由美(工)	大竹 直子(医病)
南 吉英(事)	池山 二郎(基)	山本久美子(医病)
齋藤 康則(事)	谷浦 葉子(医病)	渋谷絵津子(医病)
水野 敬仁(理)	圓見 千代(医病)	前田 育宏(医病)
尾西 克之(理)	植園 法子(医病)	内川 利孝(医病)

(総務部人事課)



統合に伴い大阪大学の新教職員となられた方々を対象とした説明会実施

平成19年10月の大阪外国語大学との統合に伴って、大阪大学の新教職員となられた方々を対象とした説明会が、11月22日(木)の午後1時30分から約2時間にわたり、大阪大学本部事務局で実施されました。

この説明会は、旧大阪外国語大学の常勤の教職員の方々に、新生大阪大学の基本理念や運営の考え方等について理解を深めていただき、キャンパスの諸施設などを見聞し、新生大阪大学の一員としての意識を共有していただくために開催され、165名の教職員の出席がありました。



説明会では、まず、鷺田清一総長から挨拶があり、統合の意義について話された後、全理事から、本学の運営組織におけるそれぞれの担当事項に関して、順に資料に沿って説明が行われました。

この説明会で配付された大学説明資料には、統合後の大阪大学の全容が簡潔にまとめられています。全学の教職員にご覧いただけるよう、大阪大学ポータル学の学内専用ホームページ「総務関係」に掲載されています。

(総務部総務課)

最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2007開催

高校生を対象に、第一線の研究者が最先端の物理を分かりやすく講義するとともに、実験やゲームも取り入れ、物理や科学に対する興味を引き出そうとするプロジェクト、「最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2007」が、大阪大学湯川記念室の主催、理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、大学教育実践センター、核物理研究センター、レーザーエネルギー学研究センターの共催で、10月20日(土)から11月24日(土)までの6週にわたり、基礎工学部シグマホールで開催されました。



毎土曜日午後3時から6時までの授業は、(1) 基幹講義：自然界の様々な世界を訪ねる (2) コーヒーブレイク：展示、交流、Q & A (3) 実践講義：ハイテクにおける物理、ゲーム、クイズ の3部で構成され、自然の謎を解き明かす最先端の物理を駆使して宇宙から極微の世界までを探索するとともに、我々の社会にこうした知識と技術がいかに生かされ実現されているかなど、未来への展望を含めて分かりやすく解説しました。

毎回、平均約110人が参加し、講義終了後には内外から集まった講師たちに活発な質問を行うなど、「知りたい、学びたい」と思って自主的に参加した高校生の好奇心を満

たすものとなりました。

また、工学研究科、レーザーエネルギー学研究センター、核物理研究センターにおける最新研究設備の見学も行われるなど、参加者にも好評のうちに全プログラムが終了し、最終日には、小泉潤二副学長名の修了証書が授与されました。

詳細は、ホームページ(<http://www.yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/SAP/>)に掲載されています。6週間にわたって大学が高校生に提供するこのプログラムは、本学湯川記念室が2005年から始めた日本初の試みですが、今回も盛況のうちに終了しました。

(湯川記念室)

千里ニュータウン再生イベントへ参加

11月18日(日)、「千里ニュータウン」街開き45周年を記念して行われた「千里ニュータウン再生イベント」に協力し、市民の方々を対象としたミニワークショップを開催しました。

当日は、「気づき体験！ー身体の動きに学ぶー」と題し、講師であるコミュニケーションデザイン・センターの西村ユミ准教授により、参加者に直接道具を使っていただく体験型のワークショップが行われました。



ブース前で行われたワークショップの様子



市民の方々が参加され好評でした。



パネルディスカッション

会場には吹田、豊中市に位置する大学等による「知のエリア」が設置され、本学のほか各大学等が情報発信のブースを設置しアピールを行いました。

また、25日(日)には千里ライフサイエンスセンターにおいて、同イベントのシンポジウムが行われ、鷲田清一総長による基調講演やパネルディスカッションも行われました。

(総務部評価・広報課)

産業科学研究所技術室設置25周年・技術室報告会20回記念「産研技術室報告会」開催

産業科学研究所技術室では、11月19日(月)、20日(火)の両日に、医学部銀杏会館において、技術室設置25周年、技術室報告会20回記念「産研技術室報告会」を開催しました。

「大学における技術職員」と題した今回の記念報告会では、「特別講演」、「全国技術職員談話」、「パネルディスカッション」等が行われました。

「特別講演」では、西尾章治郎理事・副学長をはじめとする有識者による、技術職員を組織化する必要性や技術室が果たす重要な役割等の講演が行われました。

「全国技術職員談話」では、名古屋工業大学技術部の小澤忠夫技術主幹等の講演が行われ、安全衛生、全国規模技術研究会、地域貢献、学民協力、人間ネットワーク等についての取り組みが紹介されました。

「パネルディスカッション」では、15を超える学内外の技術長・技術室長が参加し、組織紹介の後、技術職員組織化の必要性等が討論され、全国規模の人間ネットワークを深めて行く必要性が確認されました。

また、「ユーザーズレポート」や産研技術室職員による「技



記念報告会の様子

術報告」があり、産研技術室の技術力、研究現場での技術室の役割が再確認されました。

今回の記念報告会には、北は北海道から南は沖縄まで、全国から150名を超える参加があり、2日間にわたった報告会は盛況のうちに終了しました。

(産業科学研究所)

産業科学研究所が科学技術イベント「彩都サンデー・サイエンス2007」に出展

11月25日(日)、茨木市立彩都西小学校において、科学技術イベント「彩都サンデー・サイエンス2007」(主催：彩都科学技術理解増進プロジェクトチーム(彩都建設推進協議会)、毎日新聞社、毎日新聞大阪開発株式会社)が開催されました。このイベントは、様々な世代の方が、気軽に科学技術と触れ合う「文化祭」として、初めて開催されたものです。

産業科学研究所からは、八木康史教授の研究室と技術室が工作・実験屋台村に出展しました。当日は天気にも恵まれたこともあり、イベント全体で2,000名を超える来場者

があり、熱心に実演や説明を聞く家族連れや、工作を楽しむ子供達の姿が数多く見受けられました。

八木研究室では、「おもしろ視覚」と題して、全方位の映像を撮影できるシステムや高ダイナミックレンジカメラのデモンストレーション、サーモグラフィによる映像が体感できるブースを設けました。中でも、子供達に人気だったのがサーモグラフィです。温度が目に見えるとあって、一生懸命段ボールに手を押しつけて、その部分をモニターで確認している子供達の姿が印象的でした。

技術室では、「おもしろ工作&びっくり実験・・・ドン

ダケー！」と題して、パネル展示や体験、工作等を行うブースを設けました。紙コップロケットや真空の世界、液体窒素の体験では、3、4メートルの高さまで飛ぶ紙コップに子供達から大きな歓声が上がりました。また、浮沈子作りや針金細工、オモシロ回折メガネ作り、炭による電池作りでは熱心にもものづくりに取り組む子供達の姿が印象に残りました。

(産業科学研究所)



平成19年度基礎工学研究科英語特別コース入学式挙行

英語による科目履修及び研究指導により修士号及び博士号を取得できる基礎工学研究科英語特別コース博士前期及び後期課程の入学式が、11月26日(月)に基礎工学研究科A棟2階会議室において挙行されました。

式では、関係者33名が出席し、教育企画推進室長の佐藤宏介副研究科長の司会の下、戸部義人研究科長から式辞があり、平成19年4月及び10月に入学した7か国10名の留学生によるスピーチが行われました。最後に、出席した基礎工学研究科執行部教員、各指導教員、英語特別プログラムWGメンバー及び英語特別コース在学生とともに記念写真を撮り、終了しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

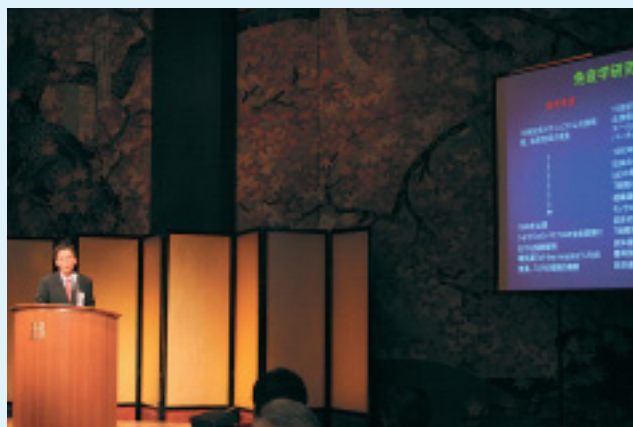


名誉教授会開催

毎年恒例の名誉教授会が、11月27日(火)、リーガロイヤルホテル「山菜の間」において、名誉教授89名及び名誉教授会から招待された総長以下部局長等26名の出席の下に開催されました。

世話人の鈴木 胖名誉教授(工)の司会による今年の名誉教授会は、本年春に開催された名誉教授招待懇談会以降に逝去された名誉教授への黙祷の後、今年度の文化功労者及び秋の叙勲を受けられた名誉教授が紹介され、瑞宝大綬章を受章された熊谷信昭名誉教授(元総長)及び文化功労者に選ばれた川島康生名誉教授(医)から挨拶がありました。

続いて、審良静男免疫学フロンティア研究センター拠点長から、「自然免疫の役割」と題する講演が行われ、また、鷲田清一総長からは、本年10月の大阪外国語大学との統合をはじめ、教育・研究活動及びキャンパスの整備状況など、大学の近況が報告されるとともに、今後の取り組みとして、21世紀懷徳堂構想など社会学連携事業について話がありました。



審良教授の講演



山賀名誉教授



会場を移して開催された懇親会では、鷲田総長による出席部局長等の紹介、山賀禮一名誉教授(歯)の発声による乾杯の後、お互いの近況報告など旧交を温めながら、終始和やかな雰囲気の中で懇談が行われ、最後に櫻井 洸名誉教授(産)の発声による万歳三唱により、盛会のうちに終了しました。

(総務部総務課)

公開講座フェスタ2007開催

大阪大学・適塾記念会が参画する HSN（阪神奈大学生涯学習）ネットと、大阪府立文化情報センターとの共催で行う市民向け生涯学習事業「公開講座フェスタ」が、11月5日(月)から11月24日(土)まで、同センターのさいかくホールで開催されました。

今年度は、「関西からの発信～新しい交流・躍進を目指して～」を総合テーマに、適塾記念会から11月13日(火)に的場梁次医学系研究科教授が、「医療事故の新しい検証モデルについて」と題し講演を行いました。

当日は、多数の受講者が参加し、最後まで熱心に聴講するとともに、終了後も活発な質疑応答があり、大盛況の講座となりました。

(総務部総務課)



平成19年度適塾記念講演会開催

毎年、適塾記念会との共催で行う適塾記念講演会が、11月28日(水)、大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールにて開催されました。

当日は、鷺田清一総長（適塾記念会会長）からの挨拶に始まり、「考古学から見た古墳時代河内政権論」と題し福永伸哉文学研究科教授が、また「肝臓病といかにつきあうか」と題し林 紀夫医学部附属病院院長が、それぞれ講演を行いました。

約80名の受講者は最後まで熱心に聴講し、終了後も活発な質問が出るなど、大変盛況な講演会となりました。

(総務部総務課)



福永教授



林病院長

吹田キャンパスで防災訓練実施

12月4日(火)、微生物病研究所正面玄関前ロータリー付近において、平成19年度大阪大学防災訓練を実施しました。今年度は、微生物病研究所、ラジオアイソトープ総合センター等の協力を得て、放射性物質を含んだ廃液が漏洩するという事故を想定し、学内関係部署への緊急連絡、汚染区域の特定及び除染、事故現場付近の通行車両及び歩行者の通行制限等の訓練を行いました。当日は、見学者も含めて約70人の参加者がありました。

(安全衛生管理部)



汚染区域の除染作業の様子

川島康生名誉教授文化功労者に選出

大阪大学名誉教授で国立循環器病センター名誉総長の川島康生名誉教授が、平成19年度の文化功労者に選ばれました。

川島名誉教授は、昭和53年より平成2年まで大阪大学医学部第一外科教授として日本の心臓血管外科の臨床と研究の発展に大きく寄与し、日本の心臓外科医の第一人者として活躍され、大阪大学在任中及び国立循環器病センターに移ってからも、日本での心臓移植再開に向けての社会的活動を行われました。

また、これまで日本胸部外科学会、日本循環器病学会会長を歴任し、2000年にはアメリカ、ヨーロッパ以外で初めての国際心肺移植学会を開催するなど、日本を代表する数少ない心臓血管外科医として、また心臓移植医療のパイオニアとして、現在も国立循環器病センター名誉総長、循環器病研究振興財団副会長として活躍されています。

大阪大学在任中には心臓移植は再開されなかったものの、多くの医師育成に力を注いだ結果、その後進によって日本での心臓移植が再開されました。このような活動が評価され、栄えある文化功労者に選ばれたものです。



秋の褒章と叙勲

平成19年度の秋の褒章及び叙勲受章者が発表され、本学関係の受章者は次の方々です。

河 田	聡	(大学院工学研究科教授)	紫綬褒章
熊 谷	信 昭	(元 総 長 ・ 名 誉 教 授)	瑞宝大綬章
又 賀	昇	(名 誉 教 授)	瑞宝中綬章
吉 信	宏 夫	(名 誉 教 授)	瑞宝中綬章
三 井	利 夫	(名 誉 教 授)	瑞宝中綬章
村 上	幸 彦	(元微生物病研究所事務部長)	瑞宝双光章

(総務部人事課)

竹谷純一准教授「日本応用物理学会論文賞」受賞

理学研究科化学専攻の竹谷純一准教授が、2007年度の日本応用物理学会の論文賞を受賞しました。この賞は、応用物理学の研究において優れた業績を上げた者に対して授与され、その功績をたたえるものです。

竹谷准教授は、受賞対象となった論文の中で、近年、超薄型ディスプレイなどへの応用が期待されている有機トランジスタについて、その基本的な性能の決め手となる電子伝導の機構を、物理化学に立ち戻って明らかにしました。この結果は、有機トランジスタの性能向上の指針にもなるため、応用物理学会においても高く評価され、論文賞受賞に結びつきました。

授賞式は、9月4日(火)に北海道工業大学で行われました。

(理学研究科・理学部)



関山 明助教「日本物理学会若手奨励賞」受賞

基礎工学研究科の関山 明助教が、日本物理学会若手奨励賞を受賞しました。

この賞は、物理学において顕著な成果を挙げ、将来の物理学を担う優秀な若手研究者の研究に授与される賞です。今回対象となったのは、「バルク敏感光電子分光の開拓と強相関物質電子状態の解明」に関する研究です。関山助教が主な実験手法としている光電子分光は、固体電子状態を直接的に知る実験ですが、従来の実験手法では、高温超伝導や金属絶縁体転移といった多彩な現象を見せる強相関物質に対してはバルク（固体内部）と異なる表面電子状態を主に観測していました。関山助教はこの欠点を、バルク敏感な高エネルギー軟X線励起光電子分光で世界初の高分解能測定を実現することで克服し、強相関Ce化合物やV酸化物等のバルク電子状態を解明することに成功するとともに、それまでバルク電子状態を反映していると信じられていた従来の光電子分光の結果が、実は表面を反映していたことを明らかにする等の業績を挙げており、その功績が評価されたものです。

なお、受賞式は9月21日(金)、北海道大学で行われました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



中野雅由教授 ICCMSE 2007「Research Excellence Award」受賞

基礎工学研究科の中野雅由教授が、9月27日(木)にギリシャのコルフ島で開催された科学と工学における計算手法に関する国際会議 (International Conference of Computational Methods in Science and Engineering: ICCMSE) において、Research Excellence Award を受賞しました。

この賞は、理論および計算化学の分野において顕著な研究業績を挙げた研究者に対して、科学と工学における計算手法に関する欧州学会 (European Society of Computational Methods in Science and Engineering: ESCMSE) から授与されるものです。

中野教授は、理論計算化学に基づいて、非線形光学現象を中心に研究を展開していますが、非線形光学現象は、物質の持つ非線形性の本質の探究という理学的な重要性はもとより、将来の光エレクトロニクスの発展に必要不可欠な特性であり、その機構の解明、新物質系の探索が広い分野から精力的に行われています。中野教授は、従来、未開拓の中間及び強電子相関系に属する開殻分子系の非線形光学特性に関して、非線形光学応答の計算法・解析法の開発、新規構造・特性相関の解明、新規物質系の提案など理論及び計算化学に基づく理論・計算先導型の先験的研究アプローチにより研究を推進されてきました。特に、ジラジカル分子系の非線形光学特性のジラジカル因子依存性を理論的に明らかにされ、従来の系よりはるかに大きな非線形光学特性を示す中間ジラジカル分子系およびその顕著なスピン状態依存性を実験に先駆けて予測されました。最近、この理論と高精度量子化学計算に基づいて、大きな非線形光学特性が予測された実在のジラジカル分子系に関して、実験化学者との共同研究により、世界最大級の二光子吸収係数 (非線形光学特性の一つ) が測定されました。中野教授は、これらの成果に基づき、「開殻分子系の非線形光学物性」という新領域を提唱されています。



(基礎工学研究科・基礎工学部)

片岡 勲教授「原子力安全功労者経済産業大臣表彰」受賞

工学研究科機械工学専攻の片岡 勲教授 (熱流動工学領域) が、平成19年度の原子力安全功労者経済産業大臣表彰を受賞しました。この賞は、原子力の安全の確保に功績のあった学界、産業界の研究者、技術者に送られるものです。

片岡勲教授は、原子炉における熱と流れ、特に、水と蒸気の混合物が複雑に流れる気液二相流現象の基礎的な解析とその原子炉の安全性への応用についての研究を行い、多くの研究業績を挙げてきました。また、通商産業省 (現経済産業省) 原子力発電技術顧問、科学技術庁 (現文部科学省) 原子力発電安全顧問、経済産業省総合資源エネルギー調査会臨時委員として、軽水炉や高速増殖炉等の多くの原子炉の設置許可に関わる安全審査において、専門家として助言をしてきました。原子力安全委員会沸騰遷移後燃料健全性評価分科会委員や日本原子力学会標準委員会委員として、原子炉の安全性に関わる技術基準の制定にも携わり、石川県原子力環境安全管理協議会の委員として、地方自治体における原子炉の安全対策について、専門家の立場から指導助言を行ってきました。さらに、日本原子力学会、日本機械学会の専門委員会委員として、原子力安全に関わる学会活動に従事するとともに、日本原子力研究所ならびに核燃料サイクル機構 (現原子力研究開発機構)、原子力発電技術機構、原子力安全基盤機構等の研究委員会委員として、原子力の安全性に関わる研究調査活動に従事するなど、多年にわたる原子力の安全性の確保に関する貢献が認められ、今回の受賞となったものです。

授賞式は、10月31日(水)に虎ノ門パストラルにおいて行われ、甘利 明経済産業大臣 (薦田原子力安全・保安院長代理伝達) より賞状とメダルが授与されました。また、受賞記念パーティが各界の関係者が多数参加して行われました。

(工学研究科・工学部)



友部謙一教授及び鳩澤 歩准教授「日経・経済図書文化賞」受賞

経済学研究科の友部謙一教授及び鳩澤 歩准教授が、2007年度・第50回「日経・経済図書文化賞」を受賞しました。この賞は、日本経済新聞社と日本経済研究センターが、過去1年間に出版された経済図書の中で特に優れた図書に贈るものです。

今回の受賞は、友部教授の「前工業化期日本の農家経済」での農家による主体均衡をキー概念とし、そのダイナミズムを解明した、極めて斬新かつ意欲的な研究が、また、鳩澤准教授の「ドイツ工業化における鉄道業」での、ドイツ語圏、英語圏、日本の研究史を踏まえ、新しい手法で「なぜドイツ（ドイツ語圏）が工業化に成功したのか」という伝統的テーマに取り組み、工業化における国民経済、鉄道、人的資本形成の積極的役割を主張したところが評価されたものです。

なお、表彰式は11月5日(月)東京・大手町のアーバンネット大手町ビルで行われました。

(経済学研究科・経済学部)



表彰を受ける鳩澤准教授



北 泰行教授「ヨウ素学会賞」受賞

薬学研究科の北 泰行教授が、「超原子価ヨウ素化学の新展開とグリーンケミストリー」に関する業績において、初のヨウ素学会賞を受賞しました。この賞は、1998年に発足し、第10回を迎える本年度よりヨウ素利用研究会から衣替えしたヨウ素学会が、長年にわたりヨウ素の科学研究や有効利用について多大な功績をあげた者に対して与えたものです。

北教授は、4半世紀前から、3価のヨウ素化合物が重金属酸化剤を代替する、毒性が少なく安全な酸化剤になり得るのではないかという観点から研究に取り組み、フェノール類やフェニルエーテル類を、3価の超原子価反応剤であるPIDAおよびPIFAを用いて初めて優れた酸化反応を行うことに成功し、アルツハイマー病薬である天然物ガラタミンの簡易合成、強い制がん作用が注目されている天然物ディスコハブディンCやAの世界初の全合成を達成するとともに、グリーンケミストリーの観点から、高効率で回収可能な超原子価ヨウ素反応剤の開発研究を展開され、今回これらの業績が評価されたものです。

なお、授賞式は11月16日(金)に千葉で開催された第10回ヨウ素学会シンポジウムで行われました。

(薬学研究科・薬学部)



海外からの招待講演者とのひととき
(中央が北教授)

山下智史君「William F. Giaque賞」受賞

理学研究科化学専攻博士後期課程1年の山下智史君が、8月6日(月)から10日(金)まで米国ハワイ州 Turtle Bay Resort にて行われた、第62回カロリメトリーコンファレンス（日本熱測定学会とのジョイント開催）において William F. Giaque 賞を受賞しました。この賞は、ノーベル賞学者である Giaque 先生の熱科学に関する貢献をたたえ、この分野において優秀な研究を行っている学生に対して贈られる賞です。山下君の受賞は、「Quantum Character and Spin-Liquid Formation in Organic Charge Transfer Salt with Two-Dimensional Triangular Lattice Structure」における、2次元の三角格子のスピ液体の熱的な検証に関する業績が認められてのものです。

(理学研究科・理学部)



谷口 純君「第22回応用物理学会講演奨励賞」受賞

基礎工学研究科博士後期課程3年の谷口 純君が、第22回応用物理学会講演奨励賞を受賞しました。

この賞は、春季及び秋季の学術講演会において、応用物理学の視点から極めて価値のある一般講演論文を発表した若手会員に授与し、これをたたえることを目的としたものです。今回対象となった講演は、「拡散光による高濃度コロイド溶液に含まれるナノ粒子の粒径と数密度の計測」で、発表内容の新規性、学術的インパクト、プレゼンテーションの明快さと質疑応答の的確さ、講演予稿集の記述、などについて審査、評価されたものです。

なお、受賞式は9月4日(火)北海道工業大学（札幌市手稲区）で行われ、尾浦憲治郎会長から賞状と記念品が授与されました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



新部局長紹介

菊 谷 仁 (きくたに ひとし)

微生物病研究所長



【略歴】

- 昭50. 3 和歌山県立医科大学卒業
- 54. 3 大阪大学大学院医学研究科修了
- 54. 3 医学博士 (大阪大学)
- 54. 4 大阪大学医学部研究生
- 54. 8 大阪大学医学部附属病院医員
- 54.10 米国メモリアルスローン・ケタリング癌研究所研究員
- 56.10 大阪大学医学部研究生
- 56.11 大阪大学医学部附属病院医員
- 57. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 58. 4 大阪大学医学部附属病院医員
- 58. 7 大阪大学助手細胞工学センター
- 平元.11 大阪大学助教授細胞工学センター
- 4. 4 大阪大学助教授細胞生体工学センター
- 8.11 大阪大学教授微生物病研究所
- 16. 4 大阪大学微生物病研究所副所長 (平成19年10月まで)
- 19.10 大阪大学微生物病研究所長 (平成21年10月まで)

新教授紹介

小 川 琢 治 (おがわ たくじ)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭54. 3 京都大学理学部卒業
- 56. 3 京都大学大学院理学研究科化学専攻修士課程修了
- 59. 3 京都大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了
- 59. 4 愛媛大学助手理学部
- 62.11 愛媛大学講師理学部
- 平元. 4 愛媛大学助教授理学部
- 9. 4 九州大学助教授有機化学基礎研究センター
- 11. 4 愛媛大学助教授理学部
- 15. 2 岡崎国立共同研究機構教授分子科学研究所
分子スケールナノサイエンスセンター
- 16. 4 自然科学研究機構分子科学研究所教授
- 19.10 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科化学専攻物性有機
化学講座
専門分野：有機化学、分子ナノサイエンス

山 下 俊 英 (やました としひで)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 平 2. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 2. 6 大阪厚生年金病院臨床研修医
- 3. 6 大阪大学医学部附属病院医員 (研修医)
- 3.12 浅香山病院医員
- 4. 7 若草第一病院医員
- 5. 7 箕面市立病院医員
- 8. 6 大阪大学寄附講座教員医学部
- 9.11 大阪大学助手医学部
- 10. 7 ドイツマックスプランク研究所研究員
- 13. 2 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 15.11 千葉大学教授大学院医学研究院
- 19.12 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科神経科学講座
(分子神経科学)
専門分野：神経科学

新教授紹介

樂 木 宏 実 (らくぎ ひろみ)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科内科学講座
(老年・腎臓内科学)

専門分野：老年内科、高血圧

【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 59. 7 大阪大学医学部附属病院医員（研修医）
- 60. 7 大阪大学医学部研究生（～平成元. 9. 30）
- 60. 7 桜橋渡辺病院循環器内科医員
- 平成. 9 米国ハーバード大学ブリガムアンドウイメンズ病院
内科研究員
- 2. 7 米国スタンフォード大学医学部心臓血管内科研究員
- 4. 9 大阪大学医学部附属病院医員
- 5. 8 大阪大学助手医学部
- 11. 4 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 14.10 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 16. 2 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院医学系研究科
- 19.11 大阪大学教授大学院医学系研究科

林 毅名誉教授(法学部)逝去



本学名誉教授林 毅先生が、10月15日(月)に逝去されました。享年71歳でした。

先生は、昭和33年3月東北大学法学部を卒業され、同年4月同助手となり、昭和38年4月より専修大学法学部で助手と専任講師を歴任した後、昭和42年4月大阪大学法学部に助教授として赴任、昭和55年12月に同教授に昇任し、平成11年3月に停年退官されました。昭和47年9

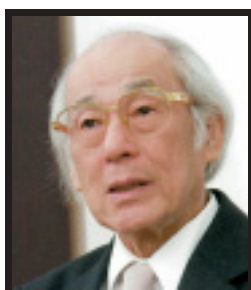
月には、法学博士(東北大学)を取得されています。退官後も平成17年3月まで大阪経済法科大学で客員教授として、研究教育に関わっておられました。

先生の研究分野は西洋法制史であり、特に中世ドイツの都市法と都市史に関する研究で、先生はこれまでに専門研究著書9冊に及ぶ膨大な研究成果を発表しておられます。当該研究領域におけるわが国の第一人者として、その理論的かつ実証的な研究により、わが国の法史学の発展に貢献するとともに、後進の育成にも大きな影響を与えてこられました。

先生は、昭和60年8月から昭和62年7月まで大阪大学評議員として、また平成7年4月から平成10年3月まで大阪大学附属図書館長として大阪大学の発展に尽力されました。そして、法制史学会の理事を数期にわたり務められるなど、学会の発展にも多大な寄与をしてこられました。研究を離れると、お酒と歌と野球がお好きな気さくなお人柄でした。在りし日の先生を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(法学研究科・法学部)

三宅正宣名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授 三宅正宣先生は、10月21日(日)、豊中市内の病院で逝去されました。享年76歳でした。

三宅先生は、昭和29年3月京都大学理学部化学科を卒業、同年4月同大学院理学研究科化学専攻に進学した後、昭和33年9月大阪大学工学部原子力工学科助手に採用されました。その後、同助教授を経て昭和58年4月に原子力工学科第二講座(原子炉材料学)教授に昇任し、同時に電磁エネルギー工学専攻エネルギー材料工学講座を担当されました。

この間、先生は、原子炉材料・燃料に関する理工学を基礎から応用まで幅広く研究され、液体金属としてのビスマスの実験、高融点金属やその合金、炭化物などの熱蒸発、熱電子放出挙動、炭化物の生成過程と炭素の拡散現象、さ

らに高融点コーティング材料などで成果をあげられ、このうち、高融点コーティング材料の開発に対しては、昭和57年に日本原子力学会技術賞が授与されました。

また、学内においては、入学試験委員会委員や工学部出版委員会副委員長をはじめ、同近畿大学原子炉利用共同研究運営委員会委員長などを歴任、また産業科学研究所附属放射線実験所運営委員会委員、レーザー核融合研究センター運営委員会員等として、長年にわたり本学の運営発展に貢献されました。

他方、学外においては、文部科学省学術審議会専門委員、日本学術会議原子力工学研究連絡委員会委員、同原子力基礎研究連絡委員会委員、日本原子力学会理事、編集委員長、評議委員、日本原子力学会フェロー会員、関西原子力懇談会参与、京都大学原子炉実験所併任教授や日本原子力研究所嘱託などとして活躍され、平成6年に退官された後は、福井工業大学教授に就任、さらに平成11年4月から平成19年3月まで福井工業大学学長を務められました。

以上のように三宅先生は、本学における研究の教育・研究の推進のみならず、わが国の原子力黎明期の礎を構築する一旦を担った一方で、近年の原子力逆風の中にあってもわが国のエネルギー危機を常に憂慮されながら、永年にわたり広い視野と高邁な見識で学生や後身の指導育成に努め、多くの優れた研究者、技術者を社会に送りだされました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

記念講義

平成20年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

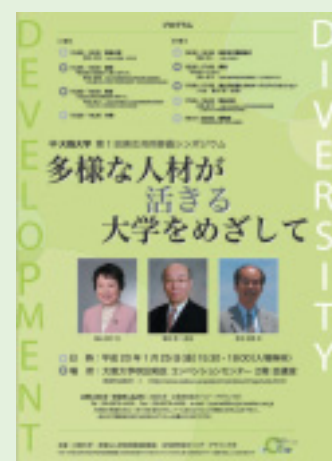
部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
文学研究科 （文化表現論専攻 西洋文学・語学講座）	柏 木 隆 雄	2月18日（月）14:30～16:30 文法経研究講義棟 （文）41講義室	メリメとバルザック —19世紀小説の二面—
文学研究科 （文化表現論専攻 西洋文学・語学講座）	林 正 則	2月20日（水）16:30～18:30 文法経研究講義棟 （文）41講義室	未定
人間科学研究科 （人間科学専攻 人間行動学講座）	桑 野 園 子	1月25日（金）10:30～12:00 人間科学研究科 ユメヌホール	変動音の評価
人間科学研究科 （人間科学専攻 行動生態学講座）	中 村 敏 枝	2月15日（金）14:40～16:10 人間科学研究科 ユメヌホール	「間（ま）」の感性情報心理学
人間科学研究科 （人間科学専攻 行動生態学講座）	南 徹 弘	2月29日（金）15:00～16:30 人間科学研究科本館 第31教室	サルとヒトの比較発達
医学系研究科 （保健学専攻医療技術科学 分野機能診断科学講座）	別 府 慎太郎	2月5日（火）16:30～ 医学部保健学科第1講義室	句読点から疑問符へ、そして感嘆符へ
医学系研究科 （生体生理医学専攻生化学・分子 生物学講座（分子再生医学））	中 村 敏 一	3月14日（金）15:00～16:30 医学部A講堂	HGF の発見に導かれて
薬学研究科 （応用医療薬科学専攻 生体機能解析学講座）	今 西 武	2月29日（金）14:00～15:30 薬学部2号館特別講義室 （4階）	生命現象に基づく高機能性化合物の 開発
薬学研究科 （分子薬科学専攻 生命分子化学講座）	北 泰 行	3月6日（木）13:30～15:00 薬学部2号館特別講義室 （4階）	有機化学に魅了され、こだわり続け て40余年
工学研究科 （生命先端工学専攻 生物工学講座）	塩 谷 捨 明	3月7日（金）13:30～14:30 工学研究科C3棟サントリー 記念館メモリアルホール	生物プロセスシステム工学と共に 40年
工学研究科 （生命先端工学専攻 生物工学講座）	ト 部 格	3月7日（金）15:00～16:00 工学研究科C3棟サントリー 記念館メモリアルホール	未定
国際公共政策研究科 （国際公共政策専攻 国際公益システム講座）	黒 澤 満	2月7日（木）13:00～14:30 国際公共政策研究科棟 講義シアター（2階）	軍縮と国際法
生命機能研究科 （時空生物学講座）	花 岡 文 雄	3月17日（月）15:00～16:00 医学部銀杏会館	私のDNAポリメラーゼ研究 —アルファからイータへ—
産業科学研究所 （高次制御材料科学 研究部門）	弘 津 禎 彦	3月14日（金）13:30～15:00 医学部銀杏会館 3階大会議室	ナノ構造の世界に魅せられて
産業科学研究所 （量子機能科学研究部門）	岩 崎 裕	3月14日（金）15:15～16:45 医学部銀杏会館 3階大会議室	表面科学の再生

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
蛋白質研究所 （蛋白質構造生物学 研究部門）	月 原 富 武	3月7日（金） 15:00～ 蛋白質研究所1階講堂	蛋白質X線結晶構造解析 40 年
接合科学研究所 （附属スマートプロセス 研究センター）	宮 本 欽 生	2月21日（木） 15:00～16:30 接合科学研究所荒田記念館	材料研究に魅せられて
留学生センター （留学生交流指導部門）	北 濱 榮 子	2月6日（水） 15:10～16:00 医学部銀杏会館阪急電鉄・ 三和銀行ホール	阪大そして社会とともに私の歩んだ道 ーサイエンス・コミュニケーション 研究を貫いてー
留学生センター （留学生交流指導部門）	古 城 紀 雄	2月6日（水） 16:00～17:00 医学部銀杏会館阪急電鉄・ 三和銀行ホール	阪大での 40 年 ー先端材料研究と国際交流の輪の なかでー
大学教育実践センター （教員研修支援部門）	細 谷 昌 志	1月21日（月） 14:50～16:20 研究・講義棟（A棟）303 [箕面キャンパス]	「形」の論理
保健センター	吉 崎 和 幸	3月6日（木） 15:00～ 医学部A講堂	難病治療へのチャレンジ ー IL-6 の臨床研究ー
世界言語研究センター （中東・アフリカ言語 文化圏研究部門）	中 島 久	1月31日（木） 13:10～14:40 附属図書館箕面分館 AVホール	未定
世界言語研究センター （中東・アフリカ言語 文化圏研究部門）	福 原 信 義	2月4日（月） 13:10～14:40 研究・講義棟（A棟）304 [箕面キャンパス]	アラブ伝統文法研究の一面 ースィーバワイヒとイブシ・ スィーナの音声記述ー

大阪大学第1回男女共同参画シンポジウム「多様な人材が活躍する大学をめざして」

多様な人材活用推進委員会と女性研究者キャリア・デザインラボの主催で、第1回男女共同参画シンポジウム「多様な人材が活躍する大学をめざして」を、下記のとおり開催します。

日 時：平成 20 年 1 月 25 日（金） 15：30～18：00
会 場：大阪大学コンベンションセンター（吹田キャンパス）
講 演：遠山敦子氏（元文部科学大臣、新国立劇場運営財団理事長）
美宅茂樹氏（男女共同参画学協会連絡会第 5 期委員長、
名古屋大学工学研究科教授）
主 催：大阪大学多様な人材活用推進委員会
大阪大学女性研究者キャリア・デザインラボ
問い合わせ先：大阪大学女性研究者キャリア・デザインラボ
TEL：06－6879－4405 FAX: 06－6879－4406
E-mail:kyariadl@ns.jim.osaka-u.ac.jp



（多様な人材活用推進委員会）

「林蝶子女子顕彰銅板」保存台(箕面キャンパス)



大阪外国語大学の沿革は、大正10年3月、大阪の実業家であった林蝶子女史が「大阪に国際人を育てる学校を」との理念のもと、学校設立資金として私財を寄付されたことに遡ります。この寄付金を基に同年12月前身の「大阪外国語学校」が大阪市天王寺区上本町に設立されました。

この顕彰銅板は、当時の同校玄関の壁面を飾り、大空襲にも焼け残り保存されていたものです。

この保存台は現在、箕面キャンパス管理棟1階ロビーに設置されています。



林蝶子女史の写真を記した
前面説明文



銅板には、「本校ノ創立ハ林蝶子ノ
建設費ヲ損ジ以テ之ヲ助クルニ由ル」
と記されています。

阪大NOW 2007年 バックナンバー



阪大NOWを1年間ご愛読いただきありがとうございました。

今年は、1月号から8月号まで“ズームアップ”をコンセプトに、キャンパス内の意外なデザインに着目した写真が表紙を飾りました。直接キャンパス内で撮影された写真を、今年もご提供いただきました安全衛生管理部の山本 仁教授に、厚くお礼申し上げます。

また、10月号は統合シンボルマークを、今月号は100号記念として、阪大NOW創刊時の表紙をイメージしたデザインとしました。

評価・広報課広報係

阪大OBに聞く「ターニングポイント！」

多くの阪大生、特に就職活動をしている学生は職種や企業の選択が目前に迫り、自らの目指すべきキャリアや人生を模索しています。

そこで、今回はキャリアに悩む学生の代表として私たちは、大阪大学の先輩である樋口泰行さんにインタビューを行いました。樋口さんは、技術者から留学や転職を経て、現在はマイクロソフトの代表執行役兼COOとして社会で活躍されています。

その樋口さんに、キャリアやターニングポイントについて、語って頂きました。



マイクロソフト COO 樋口泰行（ひぐち・やすゆき）

1957年生まれ。大阪大学工学部卒業後、松下電器産業入社。89年ハーバード大学経営大学院（MBA）入学。同社退社後、ボストンコンサルティング、アップルコンピュータ、日本ヒューレット・パッカード（日本HP）などを経て、05年5月ダイエー・代表取締役社長就任、07年からはマイクロソフト代表執行役兼COO（最高執行責任者）就任、現在に至る。主な著書に「愚直論」、「変人力」（ダイヤモンド社）。

—— ご自身の転職や留学の中で、最も大きく自分が変わられたターニングポイントはいつですか。

たくさんありますが、マインド、つまり精神的な変化という意味ではMBA留学ではないでしょうか。

留学先のハーバード大学で、全く別のキャリアを持つ人達と触れ合い、自分が技術者として歩んできたキャリアの幅が狭いものを感じました。この留学が、視野を広げるきっかけになったと思います。

—— どんな経緯でMBA留学をされたのですか。

最初は技術者として一人前になりたいという思いから、MBA留学ではなく技術留学を希望していました。

入社直後から「社会人としてしっかり仕事をしないと一人前になれない」という考えで、学生時代とは人が変わったように仕事に打ち込んでいました。特許や業界初の製品の開発にも関わるようになり、周りから「すごいね」と言われるようになりました。そのうち、自分がお手本にした人がまわりに少なくなってきたので、海外の最先端の技術を身につけたいと思い留学を希望しました。

その時上司から、「海外で技術を学んでも、帰ってきたら現場からは離れることになる。管理職で役立つマネジメ

ントの勉強しては？」と、アドバイスを頂きました。

—— 最終的に技術留学ではなくMBA留学を選んだ理由は何だったのですか。

大学時代から留学には行ってみたかったので、行かせてもらえるのであればどんな形でもいいと思いました。また、過去を振り返ってみると、ツアー企画などのビジネスにも興味があった学生時代の自分を思い出しました。それを考えると、今まで深く身につけてきた「技術」というベースの上に、「ビジネス」が学べるのであれば、いいチャンスだと思いました。

—— MBA留学を通して、樋口さんはどのように変わられましたか。

留学中は何かを身につけるというより、卒業するための勉強で精一杯でした。卒業できないと、会社に迷惑がかかり、自分も何のために留学したかわからないですからね。ただ結果的に考えると、それくらい厳しい環境だったからこそ、自分の考えをどのような場でもきちんと主張できるマインドが身に付いたと思います。

—— キャリアを決める上で最も大事にされている価値基準は何ですか。

30代までは、自分の収入を上げたい、スキルを磨きたい、キャリアを積んでいきたい、人に認められたいという基本的な欲求が強かったですね。そのため、新しい知識の獲得やスキル向上が望めないと思えば、転職を決意していました。

40歳を過ぎてから収益責任や職場作りを任せられ、自分だけでなく、社員の成長を重視する経営者としてのマインドが大切だと認識するようになりました。だから今は、社員の皆さんと喜怒哀楽を共にし、結果を出して、社員の皆さんも成長できるような会社作りができるかどうかを、キャリアの価値基準にしています。

—— 経営者としてのマインドは自然と身につけられたのですか。

そうですね。日本 HP の時は合併後の統合作業、ダイエーの時は企業再生という、経営者として特に現場のマインドを改革することが求められていました。そのため経営者として、現場を大事にし、現場の社員が効率的に働けることを、第一に考えるようになりました。

今どんな会社でも、成長機会が減ってきて、戦略の見直しが迫られています。そんなときこそ、社員の皆さんが成長できる職場作りが重要だと思います。

—— 樋口さんの目指す「社員が成長できる職場」とは何ですか。

社員が生き生きと働くことができる職場ですね。仕事では、給料をもらうわけで、必ず嫌なこともしなければなりません。理想的な職場は存在しません。そんな中でも、現場の声が会社内にオープンに響いて、社員が生き生きと働ける職場を常に追求していきたいです。そのために今私は、現場の声を聞き入れる感受性を持てるようにしています。

—— 5年後、10年後のビジョンは何ですか。

特に大きいビジョンはなくて、「巡り合わせを大事にして、目の前のことを頑張っていれば、何かいいことがあるかな」くらいにしか考えていません。昔から「10年後にこうなってやろう」という明確なビジョンは持っていませんでした。ただおぼろげながら、小さくていいから、お山の大將になって「自分が良いな」という職場を作りたいとは考えていました。しかし、まさか日本 HP やダイエーの社長になるなど、夢には思いませんでした。

—— 阪大生へのメッセージを。

物事に対して「何が言いたいんや。」と、真理を追究する大阪特有の DNA はビジネスに向いていると思います。思考回路を大阪で閉じてしまうのではなく、是非その大阪特有の DNA をベースに、自分の体をいろんな場所に持って行って、いろんなことを吸収して成長して下さい。頑張ってください。応援しています。

〈インタビューを終えて〉

インタビュー予定時間を超えて、着飾ることなく本音を語って頂き、終始樋口さんの熱い思いに圧倒されました。中でも樋口さんの型にはまらないキャリアの捉え方に共感を覚えました。



取材者(左から)
百々路裕二郎(工・修2)、増谷朱美(文・2)、楠田翔(工・修2)、
河村崇文(工・修2)、

工学研究科/工学部では、学生が21世紀の社会における進路設計・目標設定を自主的に描けるよう、「キャリアデザイン(4年生対象)」、「知価社会論(大学院対象)」という講義を実施しています。それらの講義では、課題設定やアプローチにおいて主体性・創造性・実行力を発揮でき、新規プロジェクトを創出できる人材の育成を目指していますが、今回、受講生である学生さんから、自分達の将来設計のために、大阪大学の卒業生であるマイクロソフト代表執行役兼 COO の樋口泰行さんにインタビューを実行したいとの申し出がありました。そして、彼らが企画から運営まですべてを担当したところ、実際にインタビューの機会を得ました。彼らは、このインタビューを通じて、感動するとともに、非常に勉強になったと語ってくれました。このインタビュー記事を読んで頂く事で、読者の方々にも学生さん達の感動が伝わると思います。

(工学研究科教授 北岡 康夫/森 勇介)

海外研修を終えて

歯学部附属病院技術職員（看護師） 野 田 かおり

今回、「メキシコ合衆国南部山岳地域先住民の口唇口蓋裂に対する異文化ケア能力の獲得」を目的とし、6月28日（木）から7月14日（土）まで、メキシコ合衆国ベラクルス州コバドンガ市コバドンガ病院での医療活動に参加する中で研修を行いました。



コバドンガ病院

メキシコ合衆国は北アメリカ大陸にあり、メキシコシティを首都とする日本の5.3倍の面積を持つ国です。人口は約1億380万人で、混血60%、先住民25%、ヨーロッパ系・スペイン系15%でスペイン語を公用語としています。衛生状況が悪いため、水道水・生水は飲まれておらず、生野菜、生魚、生卵にも注意が必要で、加熱処理がかかせません。

6月28日にメキシコシティへ到着し、6月30日にベラクルス州コルドバ市に移動、7月1日に現地NGO団体CLAYPAと合流し、現地先住民の口唇口蓋裂患者約80名の患者の診察助助を行いました。

診察は乳幼児から優先的に行われ、小児科診察も行われます。NGOでも日本と同じく「適切な時期の手術」を目指しています。そのため、口唇形成術、口蓋形成術が最優先され、思春期の口唇修正術や残遺孔閉鎖術を受けられない患者が多く見られました。また、長期間の入院が必要となる骨移植などの大きな手術は行えないため、手術が必要であっても受けられないという現状もあります。

7月2日から5日まで、コルドバ市コバドンガ病院にて当院の口腔外科医の手術見学を行いました。1日に7～8

件の手術予定が組まれ、口唇形成術、口蓋形成術、口唇修正術、咽頭弁形成術など計29件の手術が行われました。手術期間中は新聞などの取材も多く見られ、NGOの活動への注目の大きさが感じられました。7月7日には、手術を受けた患者とその家族がコバドンガ病院に集まり、最後の診察と記念撮影を行いました。

7月6日には、ベラクルス州政府保健局にてベラクルス州の口唇口蓋裂疾患に対する次期JICAプロジェクトの概要説明と、現在の活動内容についての意見交換を行いました。この会談にて次期プロジェクトにおけるベラクルス州での活動拠点病院がリオブランコ総合病院に決まったため、リオブランコ市総合病院を訪問し、病院設備・医療環境の視察を行いました。リオブランコ病院は小児科の設備が充実していることから、活動拠点病院へと提示され、次回の平成19年11月の医療援助活動を行うことになったものです。

今年5月に来日し、本院で口唇口蓋裂の手術治療を行ったルイス・フェルナンド君の診察のために住んでいる村を訪問しました。フェルナンド君の術後の経過は良好であり、摂食障害や構音障害も認められませんでした。

メキシコでは貧富の差が大きく、医療を受けることのできない人達が多く存在する現状があり、口唇口蓋裂は急を要し生命に直結する疾患ではないため、現地先住民が生活する山岳地域などでは治療が行えることを知らずに成人している人もたくさんいます。このような地域では病院や役所、学校などはなく、自給自足の生活で、文盲の人も少な



手術風景



手術後の病室

くありません。「メキシコ合衆国先住民に対する口唇口蓋裂医療援助活動」では先に述べた地域に多く存在する口唇口蓋裂の患者に対して、入院・手術などの治療をすべて無料で行っており、多くの患者が治療の行われる病院に診察や治療を希望して訪れます。今回約 80 名の患者診察が行われましたが、手術件数に限りがあり、思春期での口唇修正術や残遺孔閉鎖術が受けられない患者がたくさん見られました。NGO 団体では口唇口蓋裂の術後患者に無料で矯正治療も行っており、スピーチエイドなども多く使用されていました。メキシコ合衆国南部山岳地域では口唇口蓋裂患者が多く見られるのに対し、その治療を行える病院と医師が少ないことも問題となっています。手術を受けるお金があっても手術のできる病院がないため、NGO の診察を訪れている患者も多く、本当に貧しくて NGO の診察治療を必要としている患者への医療提供が滞ってしまう恐れもあると感じました。また、手術を受けた患者はすべて手術翌日の退院となるため、どの術後でも当日・翌日からの経口摂取となり、ほとんどのケースにおいて日本では病院で入院し、経過観察である期間を自宅で過ごすことになります。このような状況下では、対象となる口唇口蓋裂の患者や家族の生活習慣や食生活を考慮すると、創の保護や保清をすることが難しく、術後合併症のリスクも高くなります。しかし、活動拠点となる病院でも普段は口唇口蓋裂に対する手術を行っていないため、看護師も疾患に関する知識が浅く、術後の援助や退院指導を行うことができません。安全な手術と良好な経過を得るためには、術後の観察や退院後の生活指導をきちんと行うことが重要となるため、手術を行う病院の看護師への教育と指導の必要性を感じました。現地の看護師への教育を行うことで、術後の注意点や制限されること、どういう場合が異常なのかを患者自身や患者の家族へスムーズに伝えることができると思われます。今後は JICA プロジェクトがメキシコ合衆国南部の様々な地域で医療援助活動を行う予定であり、より多くの患者と接

することになります。医療人として参画する場合、限られた時間の中で現地の医療スタッフとコミュニケーションを図りながら患者への指導を行わなければならないため、言語の獲得やコミュニケーション能力の向上などが必要であると考えます。

今回の研修では、初めて他国の病院を訪問し、言語の違うスタッフと一緒に活動することができました。言葉は通じなくても、ジェスチャーや文字、表情でコミュニケーションを図り、協力しながら看護ケアが行えることを実感しました。患者との関わりも同様であり、ジェスチャーや表情で大丈夫であることを伝えたり、患者が何を心配しているのかを理解することができました。言葉で伝えられない分、自分の表情や態度が患者に与える影響は大きいので、患者への気配りや自己の体調管理も重要であると感じました。異文化といっても看護には共通のものがあり、相手を思いやる気持ちを伝えることがケアにつながると確信しました。

また、「メキシコ合衆国先住民に対する口唇口蓋裂医療援助活動」に参加したことで、多くの経験と自信を得ることができました。この研修での経験を生かし、患者と丁寧なコミュニケーションを心がけることで、より良質な看護ケアを行っていきたいと思います。また、研修での経験を本院スタッフと共有することで、チームとしての看護能力の向上も図っていきたいと考えます。



現地スタッフと

(歯学部附属病院)

日本文学と日本文化にひかれて

文学研究科研究生 ナルバンディアン・カリーナ (イスラエル)



■ イスラエルについて

シャーロム！

ヘブライ語で、これは意味が二つあります。まず、「平和」です。そして、「こんにちは」という挨拶です。このヘブライ語は、私達イスラエル人の言葉です。イスラエルは、とても小さいですが、非常に美しい国です。人口は、約700万人で、面積は約22km²。でも、海が3つもあります。それは、地中海、紅海、そして死海です。紅海は一番きれいです。死海は一番人気です。イスラエルの南には、大きな砂漠があります。砂漠と呼ばれていますが、冬になると、すべての砂漠はあちこちに赤や黄色の花が咲いて、とても鮮やかで美しくなっています。このように、イスラエルの自然は、非常にきれいです。機会があったら、ぜひ来てください。

■ 留学生の生活

私は、イスラエルから来た大阪大学の研究生です。カリーナと申します。専門は、日本文学です。日本人に何を研究しているのかと聞かれて、「平安時代の女性の作家」と答えると、いつも「はあああ？本当？難しい！」と言われます。これは、日本人は一般的に古文を学校で学んでいて、良く知っているからだと思います。古文は、非常に難しいですが、本当に面白いです。

日本文学を研究することに決めた理由は、子供の時から家に日本の随筆や歴史物語や童話の翻訳書があったので、それを読みながら育ってきたからです。その頃から日本文学と日本文化に関心を持っていました。医者家庭に生まれたけれども、東アジアの学者になると決めました。テル



アビブ大学の東アジア学科を卒業して、エルサレムのヘブライ大学で日本文化での修士号を取りはじめました。しかし、夢は日本に留学して、日本文学を研究することでした。文部科学省の奨学金を申請して、大阪大学を第一候補にしました。大阪大学に決定されたとわかって、言葉で言い表せないほど喜びました。今年4月に日本に到着し、日本語研修コースを取り終わって、現在文学部のコースを取っています。いっぱい勉強していますが、もちろん、暇があったら旅行をしています。日本は、絶対に美しい国ですよ。

■ 将来の夢

私には、将来ぜひ実現したい夢があります。それは、日本のことについて翻訳し、イスラエル人に日本文化をもっと知ってもらえるようにすることです。しかも、文化を通じて、日本とイスラエルの関係を深めて、向上させていきたいです。私は、自分の将来について、日本文化と日本語に深く関係していきたいと考えています。



日本の伝統的な文化への興味

工学研究科研究生 マルチン・シェファラ (チェコ)



■ 自己紹介

初めまして、マルチンと申します。チェコから来ました。大阪大学工学部の研究生です。自然環境化学を勉強しています。まず母国を紹介して、次に日本への興味について簡潔に書きます。

■ 母国

チェコは中央ヨーロッパにあり、古い歴史を持っている国です。最近の重要な歴史的な出来事は、1989年のピロード革命で共産主義から民主主義への転化を始めたこと、そして1993年にはチェコスロバキアがチェコとスロバキアに平和的に分離したことです。

毎年多くの日本人観光客がチェコの首都プラハを訪問します。しかし、チェコにはプラハだけではなくほかにも世界遺産が11件もあります。世界遺産の密度が一番高いのがチェコです。史蹟も美しい自然も楽しめる国です。また、チェコの古い文化に興味を持ってチェコを訪れる人も大勢います。特に、クラシック音楽のためにチェコに来る人は多いです。チェコの作曲家は日本でも有名です。スメタナの「モルダウ」は今でも人気があります。私は最近ドヴォルザークの「スラブ舞曲」をコンサートで聴きました。アール・ヌーヴォーの絵が好きな人は、ミュシャのポスターやカレンダーを知っているでしょう。

有名な特産品はチェコビールです。ピルスナーというビールの種類は、チェコのプルゼニュという町に由来する名前です。

チェコに来る日本人は、観光客や会社員だけではなく、留学生もいます。プラハでは約1,500人の日本人が住んでいます。日本人の留学生は、クラシック音楽やスポーツの勉強している人が多いです。



豊中祭り

■ なぜ日本に来たいと思ったのか？

日本に行くことは、とても長い間私の夢でした。なぜなら、日本の伝統的な文化に興味があったからです。たとえば、書道、茶道、武道と日本仏教、特に禅に興味があります。チェコや留学先で、日本人や日本に行ったことがある人に会い、現在の日本の様子についての知識を得ました。大学の時、日本で行なわれている研究は一流という情報を得たこともあり、一層日本に行きたくくなりました。

■ 阪大での生活

ヨーロッパの大学の生活と比べたら、日本では、多くの人は学校に住んでいるのかと思うほど、毎日朝早くから夜遅くまで仕事をしています。しかし、仕事だけでなく遊びもします。例えば、阪大に来てひさしぶりにバレーボールや綱引きを他の学生と一緒に楽しみました。また、研究室の皆で行った京都への遠足も面白かったです。和菓子を作る体験したり、美味しい湯葉料理を食べたり、京都のお寺で参拝したりしました。



研究室の仲間との京都旅行

■ なぜ外国人が日本の伝統的な文化に興味を持っているのか？

ヨーロッパの芸術に対して、日本の伝統的な芸術は術だけではなく「道」です。様々な「道」で日常生活においてバランスを得ることができます。さらに生活する上での重要な疑問を理解できます。どのような疑問を理解できるかという問いに関して、私は最後に次の質問を皆さんにしたいと思います。

When you were born, where did you come from?

(生まれる前にどこにいましたか？)

Who are you? (あなた自身とは？)

CNRS

(Centre National de la Recherche Scientifique;
フランス国立科学研究センター)



CNRSは、フランス研究省 (Ministry of Research) が統括し、基礎科学研究を主たる目的とする国の研究機関です。1939年に設立され、人員約31,000名（うち研究者約11,700名）を擁し、年間予算が約31億ユーロにのぼるフランス最大の国立研究機構です。その研究分野は、数学・物理・地球科学・天文学、化学、生命科学、人文・社会科学、環境科学・持続的開発、通信・情報科学技術にわたります。

研究は、年限4年（更新可能）の約1,200のユニットで行われており、うち約2割はCNRSの直轄研究所ですが、残りの8割は、フランス国内の大学や他の研究機関との共同研究ユニットです。

外国の大学や研究機関との共同研究にも力を入れており、フランス国内だけでなく、ブリュッセル、モスクワ、ワシントン、サンティアゴ、ヨハネスブルグ、東京、北京、ハノイにも事務所を構えています。近年では、LIA (Associated International Laboratory) または LEA (European Associated Laboratory) というバーチャルな国際連携研究所を展開しており、すでに54にのぼります。

大阪大学とCNRSは、従来より、研究者レベルでの関係は深く、日本学術振興会とCNRSの共同助成事業に採択されているプロジェクトも少なくありません。2005年には、CNRSと大阪大学が学術交流協定を締結し、同年、産業科学研究所が「パリ産研ヨーロッパランチ」をCNRS内に設立し、産研国際会議にCNRSから参加いただくとともに、パリ大学（オルセー）で3回のシンポジウムを行い、定期的な交流を行ってきました。

また、今年の10月には、大阪大学を含む日仏5機関が共同でLIA「日仏磁気核融合研究所 (FJ-MFL)」を設立しました。詳しくは29ページの記事をご覧ください。

ホームページ：<http://www.cnrs.fr/>



分子噴射による超高真空配向製膜装置 (EJM)
[CNRS・THALES社協同物理学研究所 (UMR137)]
©CNRS Photothèque/THALES-RAGUET Hubert

編集後記

平成10年6月から『学報』が『阪大NOW』と名前をかえスタートして、本号がちょうど100号の記念号となりました。私が担当となった平成17年4月からでも、オールカラー化・内容のリニューアルなど様々な変更を行い、大阪大学の今がよくわかる広報誌を目指してきました。今後も、大阪大学からの情報発信の一つとして、構成員のみならず大阪大学に関心を持たれている全ての方に、よりよい情報を提供していく広報誌を目指していきたいと思います。

また、今月号での新たな試みとして、「TAの活動」「インタビュー」「留学生」と学生による記事を多く掲載しています。教職員だけでなく、学生も含めた構成員の皆さんとこれからも『阪大NOW』を作り、ともに大阪大学をアピールしていくことができればと考えています。これからも、ご意見・ご協力よろしくお願いいたします。

(瀬尾)

フィギュアスケート部

「全員でつくる最高の演技」



私たちが打ち込んでいるフィギュアスケートは、多くの人に愛され、注目されているスポーツです。このスポーツは氷上の舞とも呼ばれ、人々を魅了する美しい演技が特徴です。「美しさ」を感じるスポーツといえば、数ある中でもフィギュアスケートを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。

フィギュアスケートといえばやはり、ジャンプ、ステップ、スピンの目立ちますが、わが部が最も力を入れて練習しているのは、これらの技を支える基本的なスケーティングです。スケーティングが速い選手は観客を魅了しますし、これが上手になると技の精度もより良いものになるからです。

この成果は大会で表われており、近年では全国の国公立大学が参加する大会で、女子総合優勝、男子総合準優勝と

いう好成績を残すことができました。個人競技の色合いが強いスポーツですが、大阪大学として他大学と競って勝負しますし、団体として楽しめる面もたくさんあります。

また部員の中には、他大学のフィギュアスケート部員とアイスダンスをしている選手もいます。個人としてだけでなく、ペア競技も楽しめる、また、他大学とも交流が深められることは、クラブ活動としての魅力のひとつです。

色々紹介してきましたが、フィギュアスケートの一番の特徴は、やはり「一人一人が主役になれる」ことです。広いリンクの上で演技をするとき、その時間は自分だけが主役です。緊張もしますが、リンクサイドから阪大フィギュアの仲間が声援を送ってくれます。持てる力を全て出し切り、素晴らしい演技ができるように支えあいます。この団結力が、阪大フィギュアスケート部の一番の魅力です。



主将 中村優介（法・法3年）

〈コメント〉

フィギュアスケートはやりがいのある面白いスポーツです！皆さんも一緒に滑ってみませんか？



練習場所：上野芝スケートリンク、臨海スポーツセンター

練習日時：毎週土曜日 9：50～13：00

部員数：男子8名、女子15名

連絡先：古谷美緒（主務）

TEL：090-6917-7553

部活HP：<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/7769/>

鷺田総長への表敬訪問や来訪相次ぐ

本学と大阪外国語大学と統合して、2ヶ月が経過しましたが、海外の大学等からの来訪が多くなっています。

統合記念式典当日の10月1日(月)には、ドイツ・ハンブルグ大学よりモニカ・アウタークルツ総長、同月18日(木)には、中国人民大学の紀宝成大学長を団長とする訪日団一行6名、同月24日(水)には、ブラジル・サンパウロ大学よりセディ・ヒラノ副学長が、鷺田清一総長を表敬訪問し、懇談を行いました。懇談では、各大学との連携・協力の強化や学術・学生交流等の在り方、そして統合後の大阪大学等についての質問が相次ぎました。

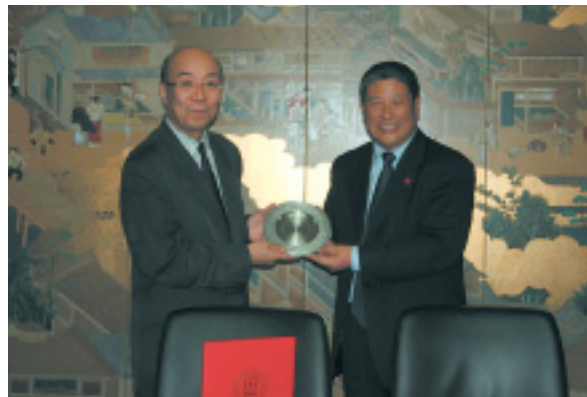
さらに11月9日(金)には、9月に駐大阪大韓民国総領事に新しく就任された呉榮煥総領事が本学を訪問し、留学生などの学生交流等の現状について鷺田総長と懇談しました。

総長表敬訪問や来訪者増加の背景には、統合によってもたらされた専門的学術研究教育システムと外国語プログラムとの融合といった本学の新たな第一歩に、交流協定の有無を問わず、海外の大学や、さらには各国の大使館・領事館からの高い関心と期待がうかがえます。

(国際部国際交流課)



アウタークルツ総長(左)と和やかに懇談する鷺田総長



鷺田総長と紀学長(右)の記念品交換



ヒラノ副学長(右から3人目)との記念写真



呉総領事(左から2人目)に説明する鷺田総長

阪大 NOW No.100 2007 12月号 2007年12月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大 NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp